

國道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

内 越 遺 跡

1983

新潟県教育委員会

國道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

内 越 遺 跡

1983

新潟県教育委員会

序

国道116号線は柏崎市から弥彦・角田山を経て新潟市に至る一般国道である。柏崎・新潟の両経済圏を結ぶ幹線道路として、沿線地域住民の生活に大きな影響を与えていた。近年周辺地域の工場進出などの開発により、その利用が盛んとなり、交通量も増加の一途をたどっている。これらの状況から建設省北陸地方建設局でも交通量の緩和と安全確保の維持をはかるため、国道116号線の改修工事計画を立案するに至った。そしてそれに係る遺跡の取り扱いについて、新潟県教育委員会とたび重なる協議を行った結果、本遺跡は昭和57年度に発掘調査を行い、記録保存することとなった。

本遺跡の調査では、県内において数少ない弥生時代終末の住居址と近世～近代における製鉄遺構、炭焼窯が検出された。弥生時代末から古墳時代初頭における土器の研究にとって良好な資料を提供したことは、地域の歴史を考えるうえで有意義なものと考えられる。これらの記録が今後の研究の一助となれば幸いである。

なお、多大な御協力、御援助を賜った西山町役場及び西山町教育委員会、また、計画から調査実施に至るまで格別の御配慮を賜った建設省北陸地方建設局長岡工事事務所の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和58年3月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

例　　言

1. 本報告書は新潟県刈羽郡西山町大字別山字熊谷1356に所在する内越遺跡の発掘調査の記録である。発掘調査は一般国道116号線の建設に伴い、新潟県が昭和57年度に建設省から受託して実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和57年7月5日から昭和57年7月28日まで実施したものである。
3. 遺物の整理、復元作業は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。
4. 発掘に伴う出土遺物の註記は遺跡名の「内越」から「UC」とし、グリッド名、遺構名を併記した。
5. 発掘調査による出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保存、管理している。
6. 遺構・遺物の実測、写真撮影及び挿図の作成は、担当者を中心として職員が分担した。
7. 本報告書の執筆は調査担当者を中心にして、文化行政課職員が協議の上、横山勝栄・大森勉・岡本都栄・折井敦・木村宗文・坂井秀弥・高橋勉・田海義正・山本肇が分担執筆したもので文末に氏名を記した。
8. 本報告書の作成にあたり、下記の諸氏から御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。
　　大沼忠春・工藤研治・小林達雄・千葉英一　　(敬称略、五十音順)
9. 第22図の原図は各報告書によるが、六地山・横山遺跡については新潟県教育委員会が、斐太遺跡(84, 89をのぞく)は中村美恵子がそれぞれ改ためて実測したものである。諸立遺跡は近刊予定である報告書の原図を使用した。
10. 報告文中における諸氏各位の氏名については、敬称を略させて頂いた。
11. 調査体制は以下の通りである。

調査主体	新潟県教育委員会(教育長 久間健二)	
管理 総括	南 義昌	(文化行政課課長)
管理 管理	歌代 庄平	(文化行政課課長補佐)
指導 指導	金子 拓男	(文化行政課埋蔵文化財係係長)
庶務管理	若杉 幸三	(文化行政課主事)
庶務	伊藤 和子	(文化行政課主事)
調査 調査担当	横山 勝栄	(文化行政課文化財主事)
調査員	中島 栄一	(文化行政課文化財主事)
タ	山本 肇	(文化行政課学芸員)
タ	田海 義正	(文化行政課学芸員)
タ	大森 勉	(文化行政課嘱託員)

目 次

序	
例 言	
目 次	
図版目次	
挿図目次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4
III 調査の概要	6
1. 遺跡の立地とグリッドの設定	6
2. 調査の経過	7
3. 層 序	9
IV 遺構と遺物	10
1. 住居址	10
2. 土 壤	17
3. 製鉄遺構	20
4. 炭 烧 窯	25
5. 遺構外出土の遺物	26
V 考察——内越遺跡出土土器の越後における編年的位置	29

図 版 目 次

図版 1 遺跡周辺の航空写真

図版 2 遺跡近景（上段—北東から、下段—南西から）

図版 3 1. 住居址全景 2. 炉址 3. 貯藏穴

図版 4 1. SK01全景 2. SK02全景 3. SK24全景 4. SK25全景

図版 5 製鉄址 製鉄址平坦面B—B'土層断面

図版 6 1. SK21 2~3. 鉢溝 4. SK06 5. SK15 6. SK12

図版 7 1~3. 1号炭焼窯 4~6. 2号炭焼窯 SK19

- 図版8 B 4区 ピット群, B 3区 ピット群
- 図版9 住居址出土土器(1)
- 図版10 住居址出土土器(2)
- 図版11 土 壤 出 土 土 器
- 図版12 造 構 外 出 土 土 器
- 図版13 製 鉄 関 係 造 構 出 土 羽 口
- 図版14 出 土 鉱 淵

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	3
第2図	遺跡周辺の地形図	5
第3図	グリッドの設定(スクリーントーンは調査範囲)	6
第4図	グリッド設定概念図	7
第5図	A 3～E 3土層柱状図及びF 3～G 3基本土層図	9
第6図	造構配置図	11
第7図	住居址及び炉址	13
第8図	住居址出土土器(1)	15
第9図	住居址出土土器(2)	17
第10図	土壤実測図(SK01・SK02・SK24・SK25)	18
第11図	土壤出土土器(1)	19
第12図	土壤出土土器(2)(SK24出土)	20
第13図	製鉄炉址(SK21)	21
第14図	製鉄址周辺の造構実測図	22
第15図	S D14出土遺物(羽口)	23
第16図	1号炭焼窯	24
第17図	2号炭焼窯とSK19	25
第18図	SK19出土遺物(羽口)	25
第19図	造構外出土土器	27
第20図	千種遺跡の土器	30
第21図	越後における弥生時代終末～古墳時代前期の遺跡分布図	32
第22図	越後における弥生時代終末～古墳時代前期の土器	折込

I 調査に至る経過

一般国道 116 号線は、柏崎市から国鉄越後線に沿って曾地丘陵と西山丘陵に挟まれた谷を通り、西蒲原郡の弥彦山、角田山麓を経て新潟市に至る延長76.1kmの国道である。昭和40年代後半から国の工場誘致と農村再開発による工場進出や、柏崎市及び刈羽村地内における東京電力株式会社柏崎原子力発電所の建設が進められようとしていた。このため建設省北陸地方建設局（以下「北陸地建」という。）では、本国道の交通量の増加を予想し、交通量の緩和と安全確保の維持をはかるため一般国道 116 号改築工事の計画を立てるに至った。

北陸地建は、改築工事の計画にあたり、昭和 50 年 12 月 15 日付けの文書で新潟県教育委員会（以下「県教委」という。）に、刈羽郡西山町和田から三島郡寺泊町北曾根の間の改築計画調査地域内の埋蔵文化財の所在について照会した。これを受けて県教委では、遺跡台帳で既存の遺跡の確認を行った後、昭和 51 年 3 月から 6 月にかけて計画線内の遺跡分布調査を実施し、この結果を昭和 51 年 7 月 6 日付けの文書に遺跡分布地図及び遺跡一覧表を添付し北陸地建に回答した。今回の発掘対象地となった内越遺跡については、昭和 51 年 6 月 15 日から 17 日まで 3 日間にわたって調査した際に新たに発見された遺跡（「古墳時代の遺物散布地・土器器片・丘陵頂上部の畠地にあって、範囲はせまく、遺物散布は稀薄である」との所見）であり、名称は近接する集落名をえて「内越遺跡」とした。北陸地建ではこの回答等を局内で検討した後、昭和 55 年 3 月 21 日付けの文書で県教委に法規決定に伴う埋蔵文化財の措置について協議した。これを受けた県教委では、昭和 55 年 12 月 8 日から 10 日まで 3 日間にわたって法線内遺跡分布調査を実施し、内越遺跡については「尾根上の平坦地に立地し、朱塗りの土器器片や別種の土器器片が稀薄ながらも散布する」との所見により、昭和 55 年 12 月 19 日付けの文書で北陸地建に本遺跡が法線内にかかるため発掘調査の必要があり、取り扱いについては昭和 46 年 11 月 1 日付け建設省第一発第 98 号の通知の趣旨に基づいて協議するよう回答した。北陸地建では昭和 56 年 2 月 19 日付けで埋蔵文化財包蔵地に係る事業計画通知書を提出するとともに、早急に発掘調査の実施を希望した。両者は協議を重ね、昭和 56 年 3 月 12 日に本遺跡の発掘調査は昭和 57 年度実施することで合意した。しかし具体的日程は未決定であったため、昭和 56 年 12 月から翌 57 年 3 月にかけて発掘調査時期について更に協議を重ねた結果、昭和 57 年 7 月中に発掘調査を完了することで合意した。県教委ではこの合意内容に沿って、昭和 57 年 4 月年度計画を立て本遺跡の発掘調査は、7 月 5 日から 24 日の間に実施することとした。そして、昭和 57 年 6 月 7 日付けで発掘通知書を文化庁に提出した後、6 月 11・12 日の両日、西山町教育委員会及び本遺跡周辺地区的区長・總代に調査の概要を説明し、作業員確保等の協力を依頼した。その結果、調査の前日までに必要作業員数を確保し、発掘調査実施の運びとなつた。

（折井 敦）

II 遺跡の環境

1. 地理的環境

内越遺跡は新潟県中央部のやや海岸よりに位置している。この地域は新潟平野と柏崎平野を境して、信越国境から日本海まで丘陵が連なっている。地質構造的には、南南西から北北東に延びる褶曲構造が発達しており、新第三系～前期更新統からなる地層が厚く堆積している。また褶曲の背斜軸に沿って吉井、西山、関原などの油田、ガス田が存在し、新潟県の中央油帯を形成している。同時に、この構造は地形にも反映し、構造方向に延びる丘陵、必従谷をつくりだしている。特に魚沼丘陵、関田・東頬城丘陵などの丘陵と、その間を流れる信濃川や波海川などの河川の配列にそれが顕著に認められる。内越遺跡の周辺においても同様であり、構造と地形の一一致が認められる。すなわち、関田・東頬城丘陵から北北東に延びる丘陵が雁行し、内陸側から八石、曾地、西山の各丘陵列を構成している。

内越遺跡は、前述した曾地丘陵の西麓に存在する。曾地丘陵西翼はケスタ地形が発達しており、斜面および山麓に2列の緩傾斜または低地が連なっている。図上では西山町大山、吉生水から出雲崎町上相田、上吉水に至る斜面と、その西側に位置する西山町藤掛から、尾野内、内越を通って出雲崎町市野坪に至る低地がそれである。一方、曾地丘陵と西山丘陵の間には、西山町砂田と出雲崎町市野坪の間に背斜軸の通る分水嶺が存在し、そこから南北に2本の河川が流れ出している。南へは別山川が谷を刻み、柏崎平野に入りて鶴石川と合流している。北は島崎川が新潟平野へと流れているが、大河津分水完成後はいくつかの放水路により直接日本海へ放流されている。また、この2本の構造性の河川に対して曾地、西山両丘陵から、尾根に直交する横谷が数多く流入している。

内越遺跡はケスタ性低地に面し、曾地丘陵から北へ派生した小尾根のつけ根に立地している。この小尾根は、つけ根から先端まで300m弱の小規模なもので、標高約65mである。小尾根の西側には、小開折谷を挟んで小丘陵が地質構造に沿って延びており、東はやや大きな開折谷が南から東へ向きを変えて曾地丘陵に収斂している。これらの開折谷と小尾根は急斜面をもって接しており、比高は西側で15m、東側で20mほどである。小尾根の北側には、別山川の形成する小規模な谷底平野が広がっている。また遺跡から海岸へは約5kmと近く、特に遺跡の西側において、大津川が海岸から西山丘陵奥深くへ入り込み、一種の回廊を形成しているようみえる。現在、遺跡周辺の植生は杉、松の人工林のほか、ナラを中心とした二次林からなり、海岸部には対島海流の影響を受けてシイなどの常緑広葉樹(照葉樹)も生育している。しかし、遺跡の北を流れる島崎川の沖積層からは、土師器とともに大量のブナ、トチ、オニグルミ、シイなどの堅果類が出土している(岡本 1977)。これら堅果類の示す植生、景観と、内越遺跡が営まれていたころのそれとは大差ないものと思われる。

(岡本 郁栄)



* 内地遺跡

● 土師器・須恵器出土遺跡 ▲ 製鉄道跡

第1図 周辺の遺跡

(国土地理院発行 昭和45年「出雲崎」昭和48年「西山」1:50,000原図)

2. 歴史的環境

内越遺跡の存する西山町は古代には三島郡に属した。三島郡は9世紀に古志郡から分割された郡で(米沢、1976・1980)，現在は柏崎市，刈羽郡を含むものと推定されるが，中世には刈羽郡と私称された。隣接する古志郡のうち信濃川以西の地域が山東郡と称され，応永3年(1396)の旦那(多岐宮カ)売券(米良文書845)に「くにハゑちこのくにさんとうこほり……上ハたきのみやをかぎり……」とあり，応永31年(1424)の認心院文書(施作史料2-765)に見える山東郡の白鳥莊が「福川・吉水・釜風」(現、出雲崎町)を含むものであったことからすると，別山川と島崎川の分水嶺，現在の西山町砂田と出雲崎町市野坪付近が刈羽郡と山東郡の境であったと想定される。この線が古代の三島郡と古志郡の境であった可能性もある。

三島郡には三島・高家・多岐の3郷，三島・多太の2駅及び御島石部・物部・鶴川・多岐・三島・石井の6神社が存在した(後名原纂抄・延喜式)。このうち三島郷・三島駅・三島神社と多岐郷・多太駅・多岐神社はそれぞれ同一の地にあったと考えられ，式内社の所在を手がかりに考察されている(註1)。諸説あるが，多太駅の比定は北陸道のとらえ方ともかかわって重要な意味をもつ。すなわち，大日本地名辞書の宮川説をとった場合は後世の北陸道と同様に海岸沿いを通ったことになり，日本地理志料の別山説をとった場合は別山川から島崎川に沿って内陸部を通ることになる。これについては歴史地理学の分野でも見解が分かれている(註2)。しかし，弥生時代から平安時代の遺跡の分布をみると，海岸線では高塩B遺跡が注目できる程度であるのに対し，内陸部では別山川沿いに数か所の遺跡が点在し，島崎川流域，特に島崎川と信濃川に挟まれた地域に集中的に分布する傾向を示す(第1図)。このことは古代の北陸道が内陸ルートを通って三島郡と古志郡を結んでいたことを傍証するものである(註3)。

西山丘陵及び島崎川流域には多くの製鉄遺跡も確認されている。げんざぶろう遺跡や杉ノ入遺跡など中世陶器を伴出するものもあるが，金谷川内遺跡や台清水遺跡は奈良時代の遺跡と報告されている(中村ほか，1977)，平野部は農業生産の場，島崎川に注ぐ沢筋は生産材生産の場であったとする説もある(金子ほか，1977)。

中世，西山町付近には長橋荘もしくは野崎保が存在したと推測される。ともに中世の確実な史料はないが，天和檢地帳の内題には別山・田沢・尾町・石地・入和田・新保・大坪・瀧谷・瀧谷新田・寺尾が野崎保と記され，野崎保であった可能性が強い(金子ほか，1976)。周辺では南北朝時代に，小木ノ城を居城とする萩氏が南朝方に立って活躍し，戦国時代には赤田城主斎藤朝信が上杉謙信・景勝の重臣として活躍した。また式内物部神社は二田大明神として武士の崇敬を集めた(註4)。

(木村宗文)

註1 三島駅・多太駅の所在は，大日本地名辞書の下宿・宮川説，上代歴史地理新考の柏崎・高浜説，柏崎年史の東の輪・舟地説等があり(いずれも現柏崎市)，日本地理資料は別山に多岐神社ありとし，別山から石地の地域を多岐郷に比定する。



第2図 道路周辺の地形図（黒丸が内越道跡）(1/15000)
 (西山町発行「西山町全図」1:10,000原図)

註2 足利龍亮は内陸ルート、小林健太郎は海岸ルートを主張する（足利 1975、小林 1978）。

註3 古代吉志郡の中心は島崎川向側内に存在したとする説もある（金子哲ほか 1976）。

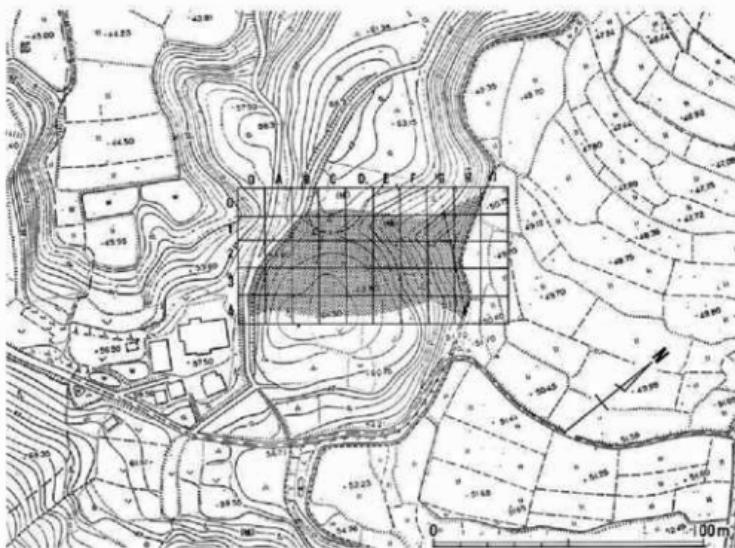
註4 永正10年（1513）「中条藤資起請文」に「若偽面申候者……可・蒙・御罰・者也」と記されるのを初め、多くの武将の起請文に記される（和田中条文書・上杉古文書ほか）。

■ 調査の概要

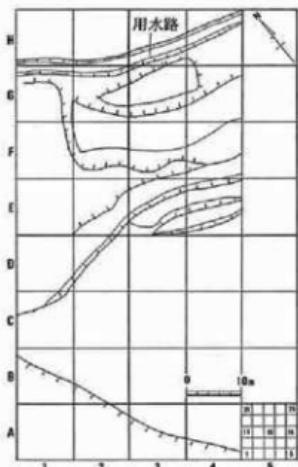
1. 遺跡の立地とグリッドの設定(第3・4図)

内越遺跡は、曾地丘陵より北北西に延びる尾根上に位置する。標高は53mから64mである。遺跡は、尾根頂上の平坦面と北東方向へ約20度の傾斜をなした斜面に広がっている。頂上平坦面は約2,000m²の広さがあり、住居址が検出された地点はこの平坦面のほぼ中央である。北東側の斜面は壇壇状に5段の平坦面が確認された。最下位の平坦面から水田面までの比高差は約3mである。南西側斜面は北東側斜面に比較して急傾斜となっている。

調査対象地域は道路建設の法線内ののみとし、調査範囲全面にわたってグリッドを設定した。建設省設定の路線中心杭の2基を任意に選び、両杭を結ぶ直線(南北線)とこれに直交する直線(東西線)を座標の基準とした。南北線はN51°30'Eを指す。この座標軸を基本に10m×10mの大グリッドを設定し、南西隅を起点にして、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表した。両者の組合せでA1・A2…とすることにした。各大グリッドは2m×2mの単位で25の小グリッドに細分し、南西隅を1とし、北東隅を25とし、各グリッドは



第3図 グリッドの設定(スクリーントーンは調査範囲)



第4図 グリッド設定概念図

草刈り後の地表観察により、斜面には雑壇状に5段の平坦面が確認された。最下段の平坦面に試掘グリッドを設定し調査した結果、黒色土層が存在し、遺構が存在する可能性があるため、各平坦面を調査範囲とした。

7月6日 北東側斜面G 3区に設定した試掘グリッドからは、表土中より鉛滓が出土した。
G 2, G 3区のほかの試掘グリッドにおいても土師器を包含する黒色土層が確認された。

7月7日 鉛滓の出土したトレーン周辺の拡張を行う。鉛滓はG 3—25区に $1.2m \times 1m$ の範囲に散在することが判明した。

7月8日 鉛滓の出土したG 3・4区の西側部分の表土剥ぎを行う。表土下はすぐに地山層となる。黒色土の落ち込みを確認する。尾根頂上平坦部のC 2～4, D 2・3区では、1・3・5・11・13・15・21・23・25の9グリッドの表土剥ぎを行う。各グリッドは15～40cmの深さで地山面となる。遺物包含層ではなく、表土層のみである。C 3区からはわずかに土器細片が出土した。

7月9日 作業に先立ち、調査地域全体の表面採集を行う。遺物は尾根上平坦部に集中する。表採後、鉛滓出土地周辺の精査を行い、土壤、ピットなどを確認する。この平坦面より一段上の平坦面であるD 1, E 1, F 1～2, G 1区では重機により表土を除去する。E 1区では表土下に黒色土が存在し、沢状を呈している。

7月10日 G 3区の試掘グリッドの土層断面図を作成する。遺跡近景を撮影する。

7月12日 B 2～4, C 2～4, D 2～4区において、1グリッドおきに表土剥ぎを行う。B

A 2-8などと表記する。

なお、調査区の南側において遺跡の広がりが予想されたため南北線にはAの南に0を、東西線は1の西に0をそれぞれ加えた。(田海義正)

2. 調査の経過

内越遺跡は一般国道116号線の改築により、昭和57年7月5日から28日までの21日間にわたって発掘調査が行われた。当初調査予定面積は $1,490m^2$ であったが、斜面における確認調査と尾根上部の試掘調査の結果、実際の調査面積は $1,320m^2$ となかった。下記の日程で作業を実施した。

7月5日 器材の搬入後、作業員全員により調査範囲内の草刈り、ベルトコンベアの設置を行う。調査前には北東側斜面は尾根頂上部発掘調査の際に堆土集積場所として予定していた。しかし

・Cラインにおいて丹塗り土器がわずかに出土する。製鉄遺構は試掘トレンチ北壁の土層からⅡ層を切って遺構が構築されたため平安時代をさかのぼらない時期の所産と考えられた。D4-1区において東西に延びる溝が確認され、住居址の周溝と推定された。

7月13日 南西側斜面、B2~4・C2~4区の表土排除を入力により行う。B3区にピット群が確認される。北東側斜面のE1・F1・G2区は重機により表土排除後、精査し、G1区に1号炭焼窯を確認する。重機はその後G1・F2区の表土排除を行う。

7月14日 F2~4・G1・2区の表土排除を重機によって行う。表土は斜面のため30~50cmと厚い。G1・F1~3区の精査によりF2区にSK02を確認する。F3区には段切り状の平坦面を検出する。C4~15区に黒色土の落ち込みを検出したため、周辺のグリッドを拡張する。E3・F3区の西壁の土層断面図を作成する。

7月15日 E1区の沢状に堆積した黒色土を除去する。ピット5基を検出する。性格は不明。G1区を再び北西側に拡張し、2号炭焼窯を確認する。C4区の精査により住居址を確認する。耕作などにより壁は東壁のみを残し、平面プランはひょうたん形を呈する。2軒の重複とも考えられる。周溝内から多くの土器が出土する。

7月16日 G3区の鉛滓の平面図を作成する。切り合いから1号炭焼窯よりSK01が新しいことが判明した。SK01・02・05~07を検出する。

7月17日 SK01・02・05~07の土層断面図を作成し、写真撮影終了後、完掘する。1号・2号炭焼窯の調査を開始する。SK05~07ではSK05が古いことが確認された。

7月19日 F3・F4区の拡張により、段切り状の平坦面を完掘する。斜面にそって幅20cmの溝が検出された。1号炭焼窯の土層図を作成する。SK08~16の検出を始める。

7月20日 2号炭焼窯の土層断面図作成、その他製鉄址周辺の土壤を検出する。H4区から北へ10mの地点の水田中に南北10m・幅1mのトレンチを設定し、遺跡の広がりを確認する。水田中に鉛滓がわずかに採集された。これらの鉛滓は製鉄遺構からの流れ込みと考えられた。

7月21日 A2~4区の確認調査を行う。A3区でSK22を確認するのみで他に遺構はない。方形プランを呈する住居址は重複せず、1軒のみと確認された。

7月22日 住居址床面の精査により、柱穴・炉址が検出される。炉址は炉石抜き取り穴の存在から石組炉であったと考えられた。周溝はほぼ全周する。柱穴は合計8本であった。

7月23日 周溝、貯蔵穴を検出する。周溝内から土器が多く出土する。遺物出土状況撮影後、平面図を作成する。器材の一部を撤収する。

7月26日 住居址平面図作成、遺物を取り上げ、写真撮影のための清掃を行う。

7月27日 SK24・B3・4区のピット群の平面図を作成する。

7月28日 住居址・ピット群の全景写真撮影後、器材を撤収し、全調査を終了する。

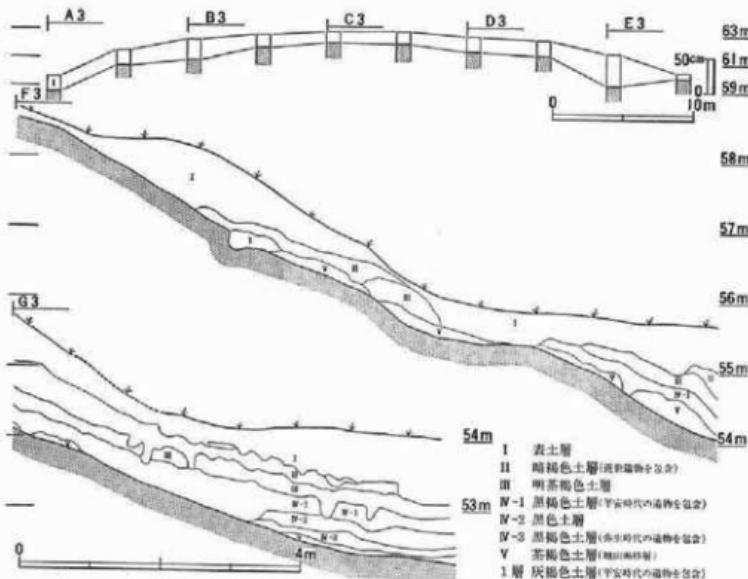
(横山勝栄)

3. 層序(第5図)

土層の觀察は、尾根を横断し、調査区域の中心を通るA 3～G 3のラインで行った。基本層序はI層の表土層からVI層の地山層まで6層に分層された。尾根頂上部平坦面では深さ30cmまではI層のみでII～VI層ではなく、すぐに地山層となる。北東側斜面中位のF 3～E 3区から下位のG 3～E 3区の間は良好な遺存状態を呈していた。各層は以下のとおりである。

I層は褐色を呈する表土である。II層は暗褐色を呈し、やわらかくしまりが弱く、約20cmの厚さを測り、近世陶磁器の包含層である。III層は明茶褐色を呈し、最大10mmの砂を多量に混入し、しまりが弱く、約20cmの厚さである。遺物は含まれない。IV層は色調や混入物などから3層に細分された。IV-1層は黒褐色を呈し、20～50cmの厚さがある。やや粘性を帯び、平安時代の遺物包含層である。IV-2層は黒色を呈し、20～25cmの厚さを有する。IV-3層は黒褐色を呈し、10～20cmの厚さである。緻密で粘性が強く、弥生時代の遺物包含層である。V層は茶褐色を呈する地山漸移層である。VI層は地山層であり、尾根頂上部では赤褐色を呈し、粘性があり小礫を混入する。斜面下位では黄褐色砂質土となる。

(田海義正)



第5図 A 3～E 3 土層柱状図及びF 3～G 3 基本土層図

IV 遺構と遺物

内越遺跡では、調査当初において、斜面における遺構の存在は考えられておらず、耕土集積地にすることが計画されていた。しかし草刈後の地形観察によって、北東側斜面には5段の離壇状の平坦面が確認され、各段に試掘グリッドを設定し調査した結果、下から2段目までの平坦面には、製鉄関係の遺構と炭焼窯が検出された。また尾根頂上平坦部においては深さ30cm～40cmまで耕作され、地山面まで攪乱を受けており、遺物包含層は確認されなかつた。しかし、地山面においては住居址、土壤、ピットなどの遺構が検出された。なお南側斜面は傾斜の度合が北東側斜面より急であり、確認調査の結果も遺構は検出されなかつた。

弥生時代の遺構は、おもに尾根頂上の平坦面に位置しており、一辺8mを越す隅丸方形の住居址が1軒、また斜面の肩部にはSK22・24の土壙が2基、ほかに北東側斜面の中位平坦面にはSK25が検出された。

平安時代の遺物はおもに斜面中のⅣ-1層から検出された。遺物を伴う遺構は少ないが、F2～4区において検出された段切り状の遺構からは底面に接して須恵器杯が1点出土しており、この時期に段切りされて平坦面が形成されたものと考えられる。

北東側斜面最下位の平坦面から検出された製鉄遺構からは、時期を明確にする遺物の出土はなく、時期は確定できなかつた。しかしⅡ層を切って各遺構が構築されているため、近世以降の所産と考えられる。

本章の記述にあたっては、遺構とその出土遺物を同一の節にまとめて述べた。なお遺構外の出土遺物については別項を設けた。また弥生土器についての器種分類は考察に必要なためV章2節にまとめて記載した。

（田海義正）

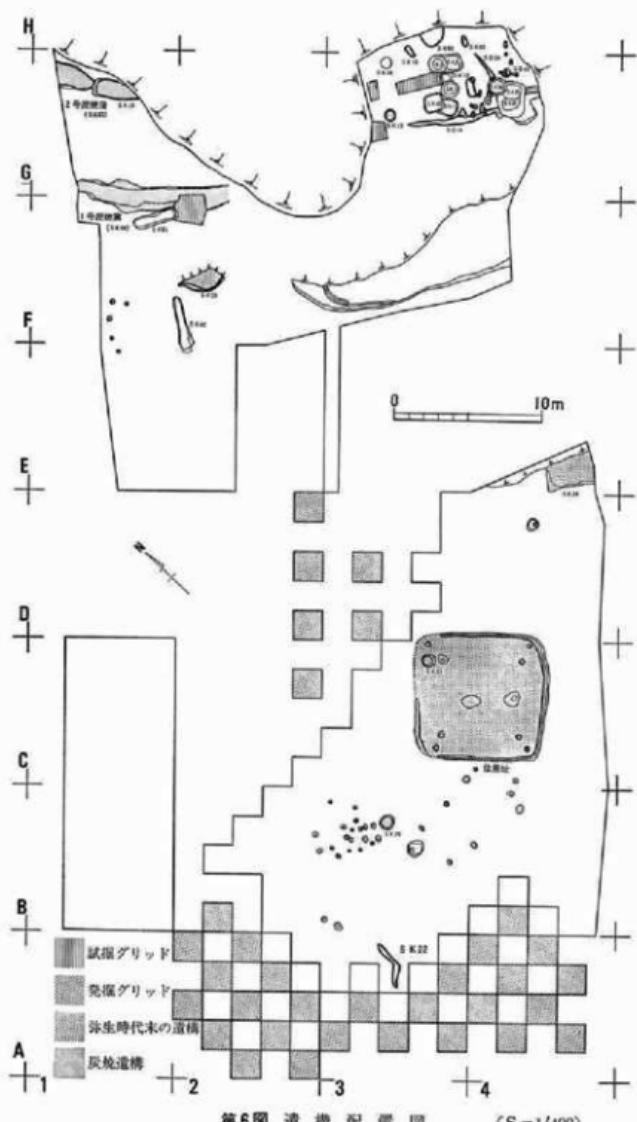
1. 住居址（第7図・図版3）

本住居址は、わずかに北西へ傾斜する尾根頂上平坦面に検出され、その大部分はC3・4区に位置する。耕作による攪乱のため、平面プラン・覆土の残存状態は不良で、西半部のプランはわずかに残存した周溝によって推測された。

遺構は地山層において検出された。覆土は第1層表土（耕作土）下にわずかに残存したにすぎない。第2層黒褐色土層、第3層暗褐色土層、第4層茶褐色土層は燒土、炭化物をわずかに含む。第3層は監隙及び周溝内に堆積していた。

プランは隅丸方形を呈し、南北で8.44m、東西で8.76mを測る。主軸はN45°Wを指し、丘陵の主軸とはほぼ一致する。壁は東半部でのみ確認された。監高は、東壁で約25cm、北・南壁で約15cmを測り、わずかに外傾して立ち上がる。壁直下には幅約20cm、深さ約10cm、断面U字形を呈する周溝が検出された。本来、壁に沿って全周していたと考えられる。

床面は、東半部で残りがよく、特に炉址、貯蔵穴周辺からP₂にかけては堅緻であった。ま



第6図 遺構配置図 (S=1/400)

た P₂周辺には木炭状の炭化物・焼土がわずかに検出された。

柱穴は、計 8 本検出され、平面形態は円形もしくは梢円形を呈する。各監測より約 1.8 m 内側に検出された P₁ (45cm × 35cm, 深さ 53cm) • P₂ (40cm × 35cm, 深さ 71cm) • P₃ (46cm × 40cm, 深さ 71cm) • P₄ (71cm × 60cm, 深さ 70cm) は、対称的に位置し、深さ 70cm 前後を測ることから、主柱穴と考えられる。P₅ (32cm × 28cm, 深さ 11cm) • P₆ (40cm × 34cm, 深さ 24cm) • P₇ (40cm × 36cm, 深さ 25cm) • P₈ (38cm × 35cm, 深さ 22cm) は、各主柱穴のほぼ対角線上の外側に位置し、深さ 20cm 前後と浅いことから支柱穴と考えられる。

炉址（第 7 圖）は、中央よりやや西側に位置し、平面は不整梢円形を呈する。上面で長軸 125cm, 短軸 84cm, 底面でもほぼ同規模で、10cm 程掘り込まれている。炉址の覆土は、第 1 層 黒褐色土層、第 2 層 黄褐色土層で、底面には 52cm × 36cm, 厚さ約 2cm の焼土が認められた。焼土を囲む 4 個の梢円形の窪み（約 30cm × 10cm, 深さ 3cm）は、炉石の抜き取り痕と考えられることから、本炉址は、石組炉であったと思われる。

平面が不整長方形を呈する土壙は、炉址と東壁との間に位置し、上面で長軸 100cm, 短軸 90cm, 底面で長軸 45cm, 短軸 40cm, 深さ 25cm を測る。覆土は炉址と類似し、底面に若干の炭化物が認められたことから貯蔵穴と考えられる。

本址北隅の SK23 の覆土は、黒色で、錆まりがないことから、本址より新しいものである。

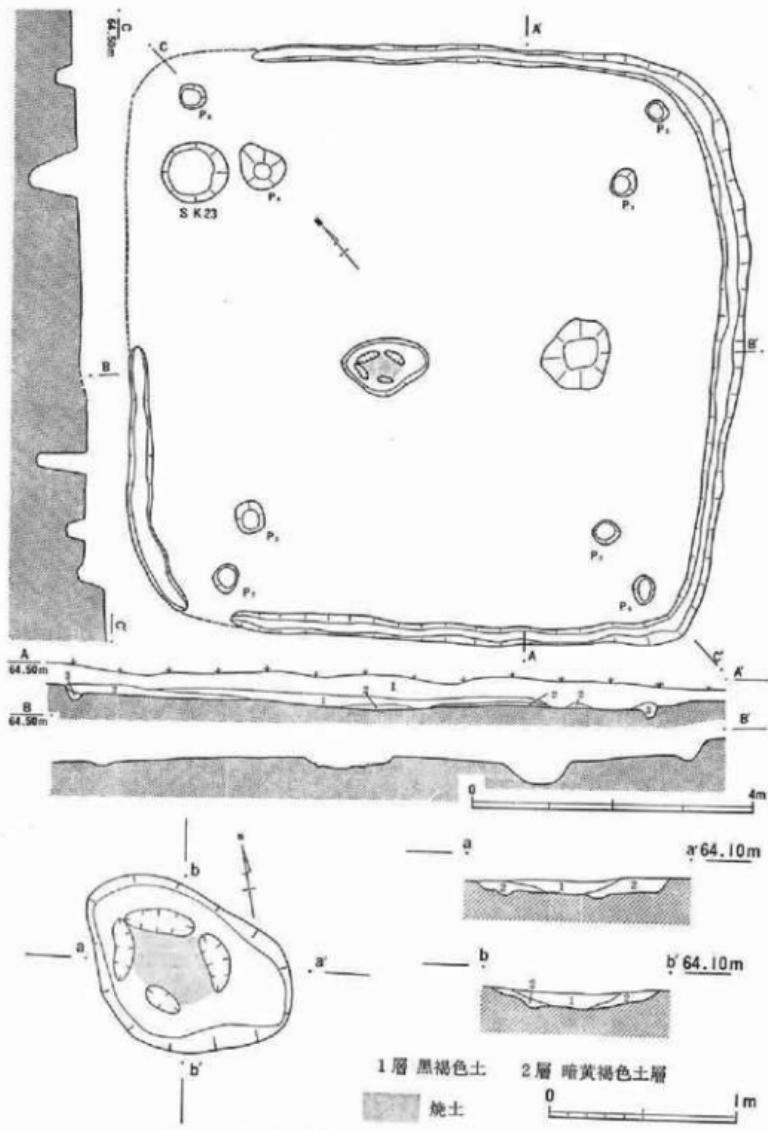
出土遺物（第 8・9 図、図版 9・10） 住居址からは弥生時代終末の土器と若干の統繩文土器片が出土している。大半は周溝及びわずかに残存した覆土から出土したものである。弥生時代終末の土器は、甕・壺・鉢・器台・高杯で構成されている。器形の明らかなものが少ないので、おもに口縁部・脚部の形態で大別した。法量は復元推定によるものが多い。

A 二重口縁のもの（A 項）と、「く」の字に外反する口縁のもの（B 項）とに、大別できるが、それぞれに多様性があり、さらに細別できる。なお二重口縁で擬凹線が施される A₁ 項は住居址からは出土していない。概して胎土には砂粒が混入され、焼成良好、色調は灰褐色ないし茶褐色を呈する。口縁部から体部外面にはススの付着がみられるものが多い。

A₂ 項（2） 二重口縁で、有段部をつまみ出して垂下させたものである。口縁部は強くヨコナデされ、端部を丸くおさめている。頭部はあまり屈曲せず、体部は梢円形を呈する。体部内外面はハケ調整である。口径は 16.8cm を測る。

A₃ 項（7・8） 二重口縁で外反してわずかに屈曲するもの。口縁部はヨコナデされ、端部を丸くおさめている。7 は体部上位外面にハケ目が残る。口径は 16.2cm を測る。8 は口縁部が強く外反し、頭部はナデツケられている。口径は 14.0cm を測る。

B₁ 項（4・5） 口縁部が「く」の字に外反して、端部はヨコナデされ、断面三角形を呈するものである。4 は口縁部内外面ともハケ調整である。口径は 20.0cm を測る。5 は頭部外面に強いヨコナデが施されている。口径は 20.4cm を測る。



第7圖 住居址及び炉址 (住居址 1/80 炉址 1/30)

B₂類 (1・3・6) 口縁部が「く」の字に外反して、口縁端部外面をつまみ上げて隆起させるものである。1は頸部内面に接合痕が残り、外面はナデツケられている。体部中位に最大径をもち、内外面ともハケ調整である。口径は18.5cm、器高は24.8cmを測る。3は口縁部内面にハケ目が残り、頸部外面にはナデツケがみられる。体部はあまり膨らまず、外面にハケ調整、内面は不定方向のナデ調整である。口径は16.0cmを測る。6は口縁部内外面を強くヨコナデされ、頸部外面はハケ調整、内面は不定方向のナデ調整である。口径は18.5cmを測る。

B₃類 (9) 口縁部は強く外反し、口縁端部に粘土帯を貼り付けて垂下させている。口縁部内外面はいねいにヨコナデされ、口径は15.7cmを測る。

壺底部 (20~23) 20は体部下位内外面ともハケ調整で、底部は2cmもの厚さをもつ。21~23はわずかに中窪みとなる。いずれも外面にススの付着がみられ、壺の底部と思われる。そのほかに体部上位に刻目を有する壺の体部破片 (44・45) も出土している。

壺 口径が比較的大きく「ハ」の字に聞くものをA類。口径が小さく、長頸を呈すると思われるものをB類とした。概して胎土は緻密で、焼成不良、色調は赤褐色を呈する。調整は、器表面の摩耗が著しいため、不明のものが多い。

A類 (11~13) 口縁端部が下方に肥厚して断面三角形を呈する。11は口縁部内外面がヨコナデされ、頸部外面には指頭幅にハケ状のヨコナデが施されている。体部上位外面はハケ調整、内面には輪積み痕が残る。口径は16.4cmを測る。12は口縁端部を強くヨコナデしてわずかに窪め、頸部外面には指頭圧痕がみられる。胎土は緻密で、焼成良好、色調は灰褐色を呈する。口径は17.5cmを測る。13は器厚が薄く、口径は17.0cmを測る。

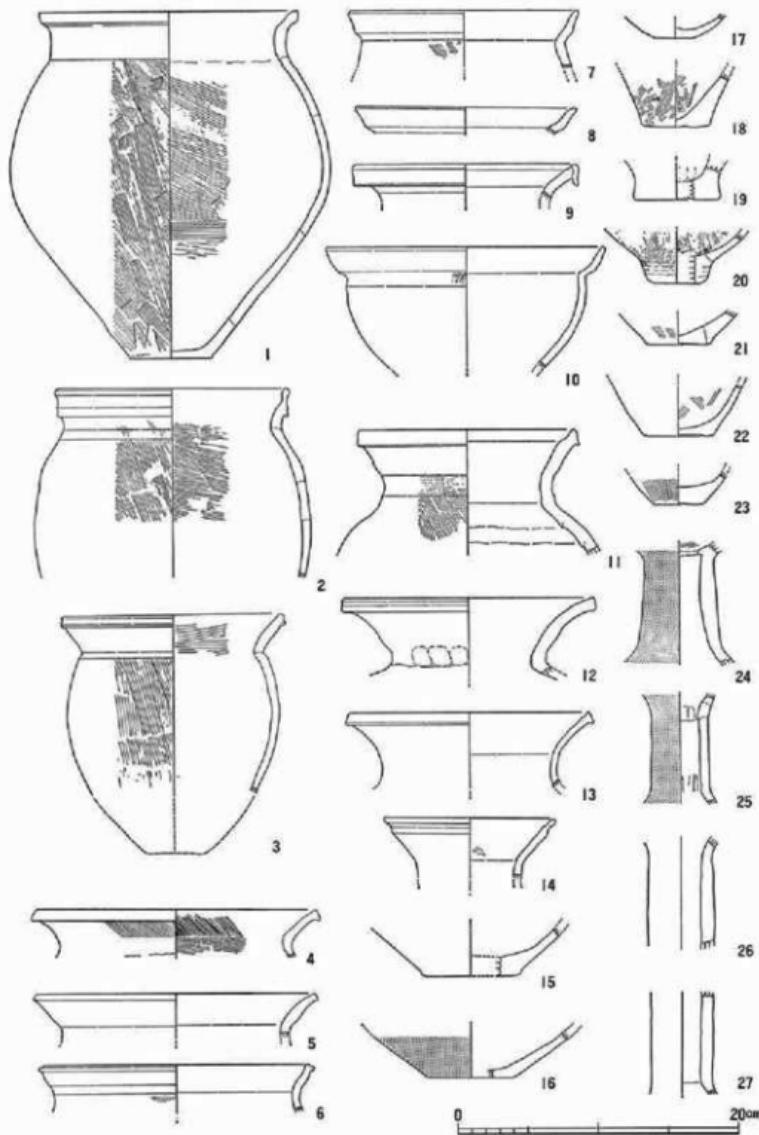
B類 (14) 口縁端部を強くヨコナデして丸くおさめている。口縁部内面にはハケ目がわずかに残る。口径は12.0cmを測る。

壺底部 (15~19) 15~17は球洞を呈する壺の底部と思われる。15・16は体部下位外面にヘラミガキ、16には円窪りが施される。18は内外面ともハケ調整である。18を除いていずれも胎土は緻密で、焼成良好、色調は灰褐色を呈する。

鉢 (10) 口縁部は内凹ぎみに開き、深い体部となる。わずかに縦位のハケ目が残る。胎土には砂粒がわずかに混入され、焼成不良、色調は明茶褐色を呈する。口径は19.8cmを測る。

器台 いわゆる棒状有段脚A類と「ハ」の字に裾の広がるB類がある。しかし大半が小破片のため、高杯の可能性もある。概して胎土は緻密で、焼成不良、色調は赤褐色を呈し、器表面の摩耗が著しく、壺と類似するものが多い。

A類 (25~27・30・41~43) これらの多くは、富山県などに類例があることから一応本類に入れた。棒状脚のものは25~27で、25は外面に丹塗りが施され、脚接合部内面には指頭圧痕がみられる。30は受部に段を有し、外面には櫛状工具による沈線が施されている。41~43は脚台



第8圖 住居址出土土器 (1) (1/4)

の破片で、凹線を施し、41~42には丹塗りがみられる。同一個体のものと考えられる。

B類 (32~34) 32は受部に段を有してラッパ状に強く外反する。調整は不明で、口径は25.0cmを測る。33は外面にヘラミガキ、丹塗りがみられる。脚径は16.6cmを測る。34は33と同様の調整が施されているが、わずかにハケ目が残る。脚径は13.8cmを測る。33・34とも胎土に砂粒がわずかに混入され、焼成不良、色調は明茶褐色を呈する。

高杯 器台同様の規準でA・B類と分類した。

A類 (28・29) 杯部下半に棱を有し、口縁部は強く外反する。28は杯部と脚との接合部外面に円板充填の痕跡がみられ、杯・脚部外面にヘラミガキ、丹塗りがみられる。胎土には砂粒がわずかに混入し、焼成良好、色調は灰褐色を呈する。口径は24.5cmを測る。29は杯部の口縁端部に粘土が貼り付けられ、外面に丹塗りがみられる。口径は29.4cmを測り、胎土、焼成、色調とも器台と類似する。

B類 (24・31) 24には円板充填の痕跡がみられ、外面はヘラミガキ、丹塗りがみられる。胎土、焼成、色調とも28と類似する。31は脚台がわずかに屈曲して外反する。胎土は緻密で焼成不良、色調は灰褐色を呈する。脚径は19.5cmを測る。

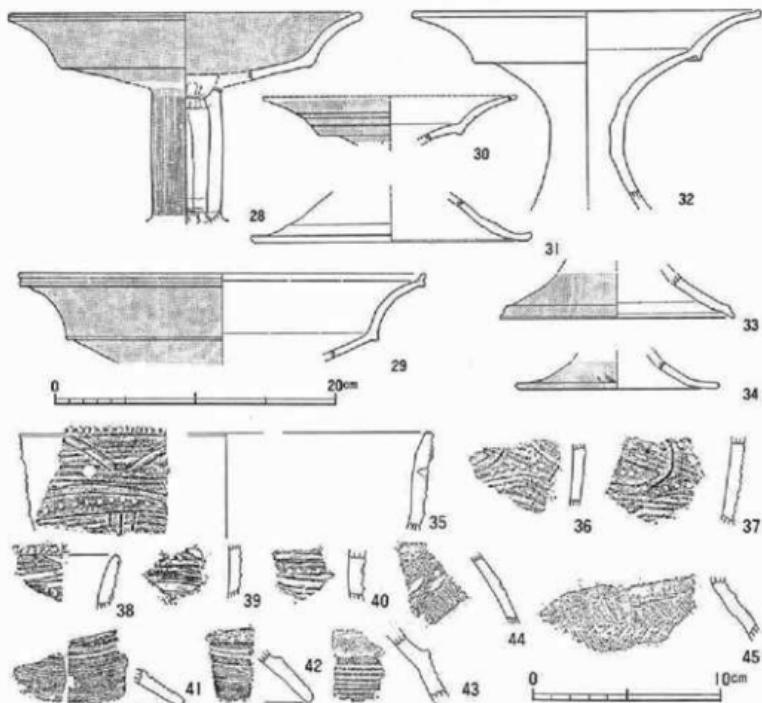
続縦文土器 (35~40) 本住居址の覆土より前述した土器群と併出したもので、深鉢の破片である。文様手法などから同一個体と考えられる。地文はR Lの原体を斜位にして押圧回転したいわゆる帶状縦文(峰山 1968)である。その後に2本単位の微隆起線文を弧状ないし平行に走らせ、さらに3本の微隆起線文を垂下させて文様を構成している。空白部には半截竹管状の工具による「D」字状の浦通刺突文、口唇部にも同様な工具による刻目が施されている。また外面には焼成後に穿孔を試みた痕跡が認められる。内面は研磨され、炭化物が付着している。胎土には砂粒が多く混入され、焼成良好、色調は黒褐色を呈する。北海道南部地方の後北C₁式(註1)に比定されよう。

以上のような弥生時代終末の土器の出土から、本住居址は該期の所産と考えられる。

新潟県内において弥生時代終末から古墳時代前期の住居址は、三条市狐崎・黒崎町緒立・吉川町長絆・巻町大沢・真野町浜田遺跡などで検出されたにすぎない。いずれも隅丸方形を呈するところに共通点がある。しかし一辺8mを越える大型住居址は本址が初見である。

本住居址において注目されるのは、弥生時代終末の土器に伴って続縦文土器の出土したことである。続縦文土器は後北C₂式・D式の時期に津軽海峡を越えて東北地方中部まで分布範囲が拡大している(註2)。しかし造構などからの出土例はきわめて少なく、本州における土器との

註1 大沼忠春・千葉英一氏の御教示によれば、本住居址出土の続縦文土器は後北C₁式の新しいものであろうとのことである。「後北式」は一応A・B・C₁・C₂・D式と編年されたものの、その型式名称は「後期北海道式薄手縦文土器」の略称であり、從来より疑義・異論が唱えられ、「江別式」(千代 1982など)の名称も使用されている。しかし、ここでは混乱をさける意味で、「後北式」を使用した。



第9図 住居址出土土器(2) (28~34 1/4, 35~45 1/3)

共伴関係は推定の域を出でていない。住居址で統繩文土器(後北C式)が出土したことはその分布範囲を新潟県まで南下させ(註3), 弥生時代終末の土器との伴出を明確にした。また、東北地方で後北C・D式を出土する遺跡の多くは、内陸部の大河川流域に立地する(佐藤 1976)のに対し、内越遺跡は比較的海岸の近くに立地する点も注目される。以上の点で、本住居址は統繩文土器(後北C式)の伴出時期を明確にしただけでなく、今後の該期研究に新たな問題を投げることになる。

(大森 達)

註2 東北地方出土の後北式土器は、北海道のものと酷似することから、人が北海道から下北半島へ上陸し、馬鹿川をさかのぼり、北上川を下って仙台付近へ到達したと考えられている(佐藤 1976)。

註3 現時点では、太平洋側においては仙台周辺が南限であり、日本海側においては、最上川上流域の寒河江市石田遺跡が南限であった(佐藤 1976)。

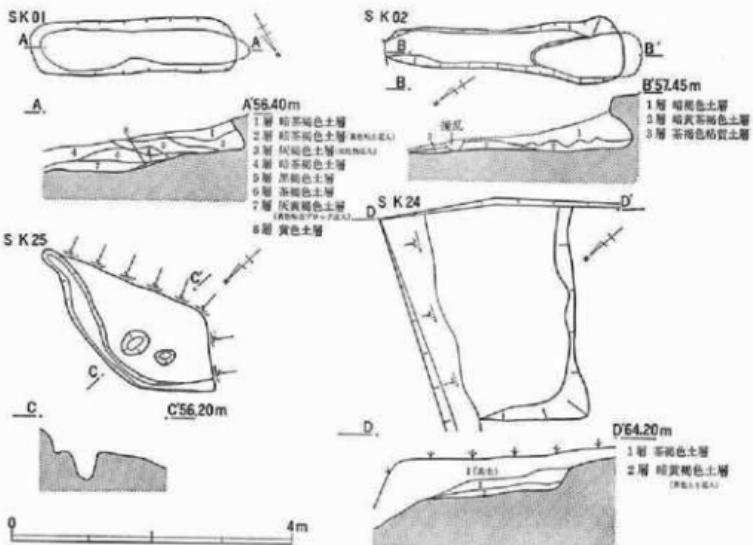
2. 土 壤 (第10~12図・図版4, 11)

住居址・製鉄遺構・炭焼窯遺構に伴う土壌以外には、SK01, 02, 22, 24, 25の5基が検出された。

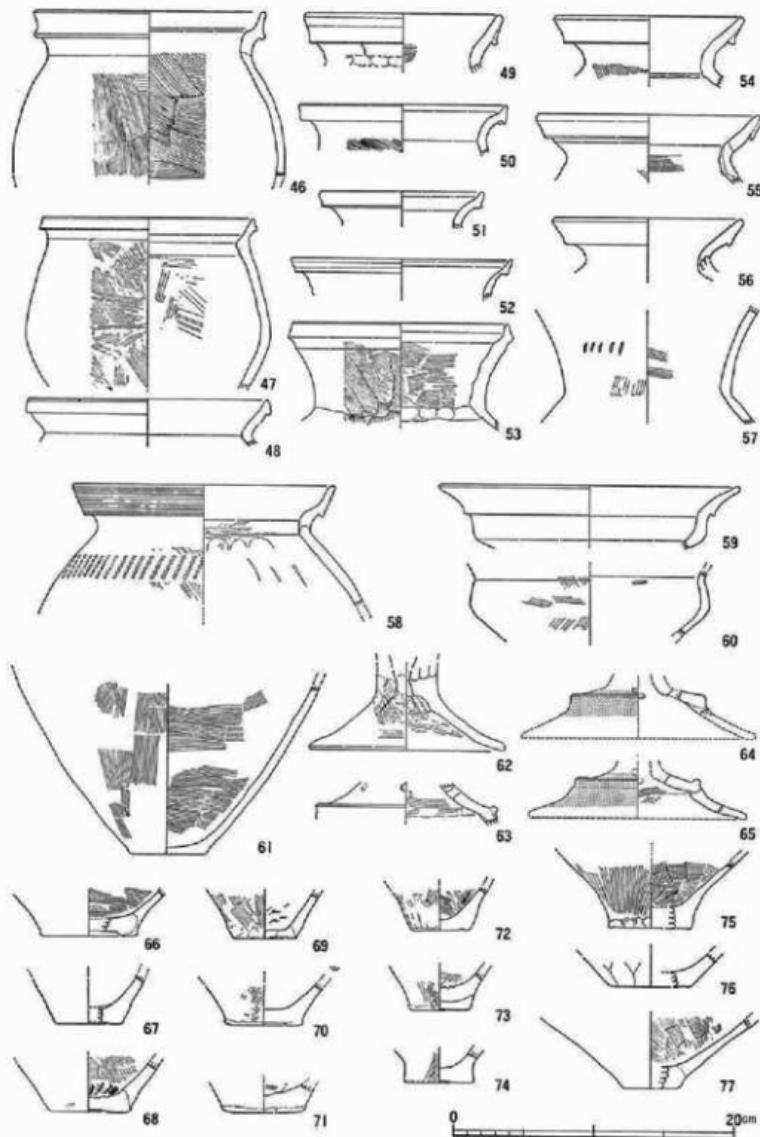
SK01 (第10図1・図版4-1) F 1-4, 5区に位置する。1号炭焼窯を切って構築される。長径1.8m, 短径0.6m, 深さ0.4mを測り, 断面U字形で橢円形を呈する。覆土は7層からなりレンズ状堆積を呈する。西端部はわずかにオーバーハング状を呈している。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

SK02 (第10図2・図版4-2) F 2-16, 21区で検出された。SK01の南約5mに位置する。長径2.3m, 短径0.5mを測る長楕円形を呈する。南端部は横穴状に約40cm程掘り込まれている。覆土は3層に分けられ、3層(茶褐色粘土質)は北側にのみ厚さ10cm程で水平に敷かれる。2層(暗褐色土)は後に土壤内に流れ込んだものと思われる。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

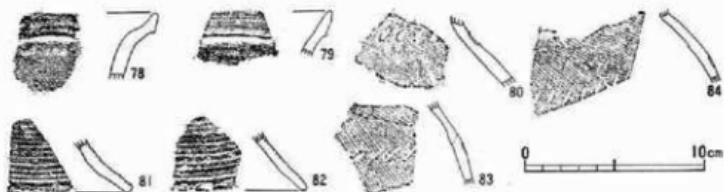
SK22 (第6図) A 3-3, 8区、南西側斜面の肩部に検出された。長さ3.2m, 幅23~43cmの「く」の字に屈曲する溝によって斜面を削り、平坦面をつくる。壁は北東側のみ残り、壁高約15cmを測る。出土遺物(第11図)は小破片で図示できるものは少ない。48は甕B1類で、口縁部はナデられ、わずかに垂下する。胎土は灰褐色を呈し、焼成は良好である。甕と思われる底部は中凹みの70と平底の76がある。弥生時代終末の所産と考えられる。



第10図 土壤実測図 (SK01・SK02・SK24・SK25)



第11図 土壌出土土器(1) (48・70・76—SK22, 58—SK25, 他はSK24) (1/4)



第12図 土器出土物(2) (SK24) (1/3)

SK24 (第10図4・図版4-3) 住居址の北東部10mの斜面肩部に検出された。東側は法線外に延びているため全体の形態は不明である。現存長3m、幅1.85m、南壁高0.4mを測る。底面は凹凸を呈する。覆土は表土下に2層あり、斜面に沿って傾斜した堆積状態である。

出土遺物（第11・12図・図版11）甕・壺・鉢・器台がある。小破片のものが多く、器種、器形は判然としない。弥生時代終末期のものと考えられる。

甕 (46~49・50~52・61・66~69・71~74・81) 46は二重口縁のA2類である。口縁部はヨコナデによりつまれ直立する。体部は橈円形を呈する。「く」の字に屈曲するB1類は47・51・81がある。47は口縁端部がヨコナデによりつまれて尖る。体部最大径は中位より下方に位置する。内外面にハケ目を施し、頸部内面には腹を有する。51は口径11cmの小型甕である。口縁部はヨコナデされ、外面に腹を有する。B4類(50・52)は肥厚し口縁端部に段を有する。50は端部が垂下し、52は口縁部がヨコナデされ、頸部がわずかに肥厚する。ほかに肩部にハケ調整の後、刻目を施すもの(82~84)や、甕の底部に中凹みの66~69・71や平底状の61・72がある。

壺 (49・53・54~57) 口縁端部がヨコナデによりつまれるB類(53)は内外面ハケ目を施す。C類(49・54~56)は外面に粘土を貼り付けて肥厚させ腹をつくるものである。甕とも考えられるが、頸部がすぼまり、口縁が小さくやや長くのびることから甕として扱う。57は長頸甕の頸部である。頸部外面に刻目がめぐる。ほかに平底で体部が聞く75~77がある。

鉢 (59・60) 算盤玉形の体部を有する浅いものである。59は算盤玉形の体部から強く外反する口縁部となり、外面には段を有する。台付鉢とも考えられる。焼成は不良で調整は不明。

器台 (62~65・83・84) 有段棒状脚のA類(63~65・83・84)は段の上部に透かい孔があり、外面に83・84のように擬凹線を施すものもある。胎土は灰褐色を呈し、砂粒の混入の少ない良質なものである。焼成は良好。外面に丹塗りがみられる。高杯とも考えられる。B類(62)は「へ」の字に聞く脚部を呈する。棒状工具で脚部基部に穿孔される。内外面はハケ目調整が施され、脚部基部には指おさえの痕が残る。

SK25 (第6図3・図版4-4) 北東側斜面中位のF 2-11・12区に位置する。長辺1.2m、短辺0.6mの不整方形を呈する。南壁部には幅約20cm・深さ5cmの溝がめぐり、直径約20cm・深さ30cmのピットが2基検出された。底面直上から甕が1点出土した。58は甕 A1種である。二重口縁で口縁端面がわずかに垂下する。頭部はわずかに肥厚し、体部は卵形を呈すると思われる。口縁帯に7条の擬凹線がめぐり、体部にはハケ目の後に幅1.5cm 5条の工具による斜行列点がめぐる。内面はナデられる。灰褐色を呈し、胎土は緻密、焼成良好な土器である。石川県塙跡に類似例があり、弥生時代終末のものと考えられる。

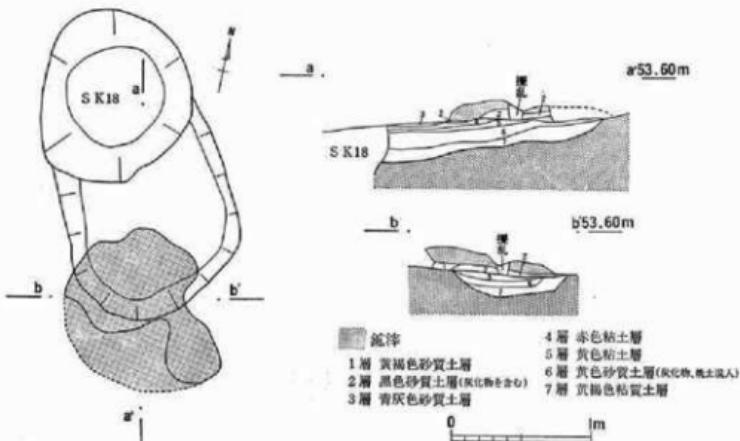
(山本 雅)

3. 製鉄遺構 (第13・14・15図・図版6・13)

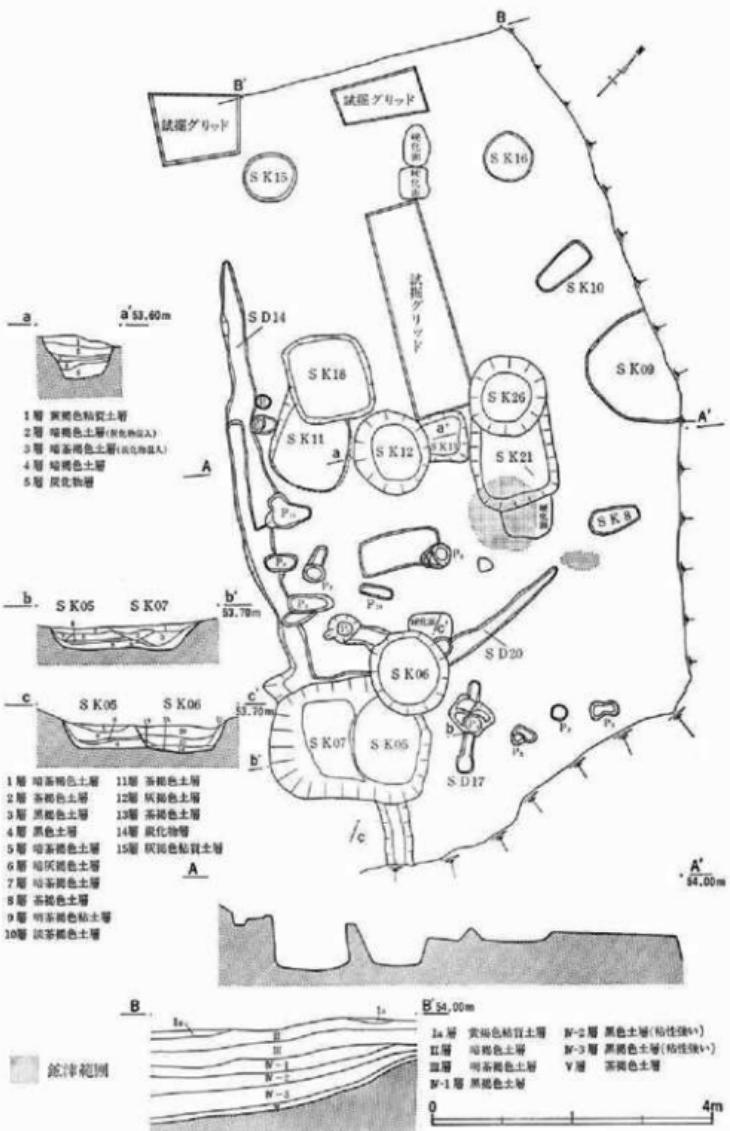
製鉄遺構は、北東側斜面最下位の平坦面、G 3~4・H 3~4区に位置する。鉱滓のほか、精鉄炉址1基、土塊14基、ピット13基、溝3本が検出された。B-B'の堆積状況から、Ⅱ層堆積後に平坦面が形成され、遺構が構築されたと推定される。

製鉄炉址 (SK21) (第13図・図版6-1~3) G 4-25区に位置し、表土除去の段階で鉱滓の分布が認められた。周辺を精査した結果、北方0.5mのところに炉址の下部遺構と考えられるSK21が検出された。炉址それ自体はほとんど破壊されており確認されなかった。

鉱滓は1.2m×1.0mの範囲に分布し、厚さ約10cmである。総重量は約122kgを測る。SK21は北側をSK18によって切られているため全長は不明であるが、現存長1.45m、幅1.2m、深さ約20cmを測る。方形を呈する掘り方に覆土が5層からなる粘土と砂質土の互層の埋土が行われていた。4層の黄色粘土は熱のため赤変している部分がある。またSK21の南側、鉱滓の直

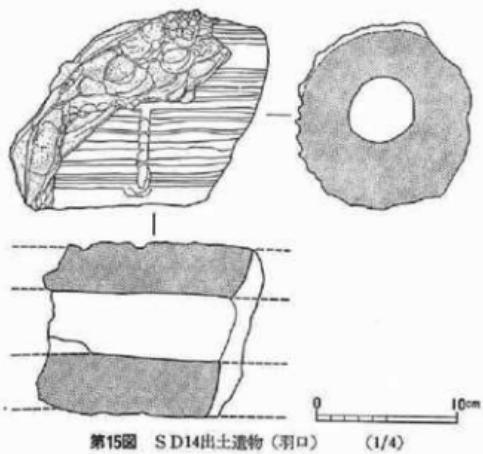


第13図 製鉄炉址 (SK21) (1/40)



第14図 鋼鉄社周辺の遺構実測図

(1/80)



第15図 SD14出土遺物 (羽口) (1/4)

下には焼土を混入する褐色土の硬化面が $25\text{cm} \times 25\text{cm}$ の範囲で検出された。SK21は製鉄炉構築するための掘り方である。

土壤 SK21以外の土壤は覆土の色調・土質などから4種に大別される。

A類は覆土に炭化物を混入するもので、SK06・12・15・16の4基がある。

SK06はSK05を切って構築される。橢円形を呈し、長径 1.2m ・短径 1.1m ・

深さ 0.4m を測る。覆土最下層には炭化物が約 10cm 堆積し、壁は火を受けて硬化している。製鉄遺構に伴う炭灰窯と考えられる。SK12はSK13を切って構築される。橢円形を呈し、長径 1.2m ・短径 1m ・深さ 0.6m を測る。壁は外傾して立ち上る。覆土最下層には木炭片が約 20cm の厚さで堆積し、最上層は黄色粘土により、土壤全体がおおわれている。SK15・16は円形を呈し、直径約 0.7m を測る。深さはSK15が 20cm 、16が 5cm を測る、どちらも覆土は炭化物のみである。SK12・15・16は壁は火をうけておらず炭溜と推考される。

B類は底面に厚さ 10cm 程に粘土を貼った土壤である。SK05・07がこの類に属する。SK05はSK07を切って構築される。SK05は橢円形を呈し、長径 1.75m ・短径 1.3m ・深さ 0.3m を測る。断面は擂鉢状となる。SK07は方形を呈し、長辺 1.75m ・短辺 1.3m ・深さ 0.4m を測る。SK05とSK07はほぼ同時期に底面に粘土が貼られる。

C類は覆土が地山の黄色砂質土と暗褐色土が版築状に交互に堆積する土壤である。SK11・18・26の3基である。平面形は方形もしくは隅丸方形を呈するもので、壁は垂直に立ち上がり、平底となる。SK11は長辺 1.2m ・短辺 1.1m ・深さ 1m 、SK18は長辺 1.25m ・短辺 1.2m ・深さ 1.4m 、SK26は長辺 1.2m ・短辺 1.1m ・深さ 1.1m を測る。SK11とSK18との重複関係はSK18が新しく、SK26とSK21とではSK26が新しい。

D類は覆土が暗褐色土の單一層である。SK08・09・10・13がある。いずれも覆土中には炭化物が混入する。SK09からは鉛錠が約 8kg 出土しており、廃棄物を処理した土壤と考えられる。

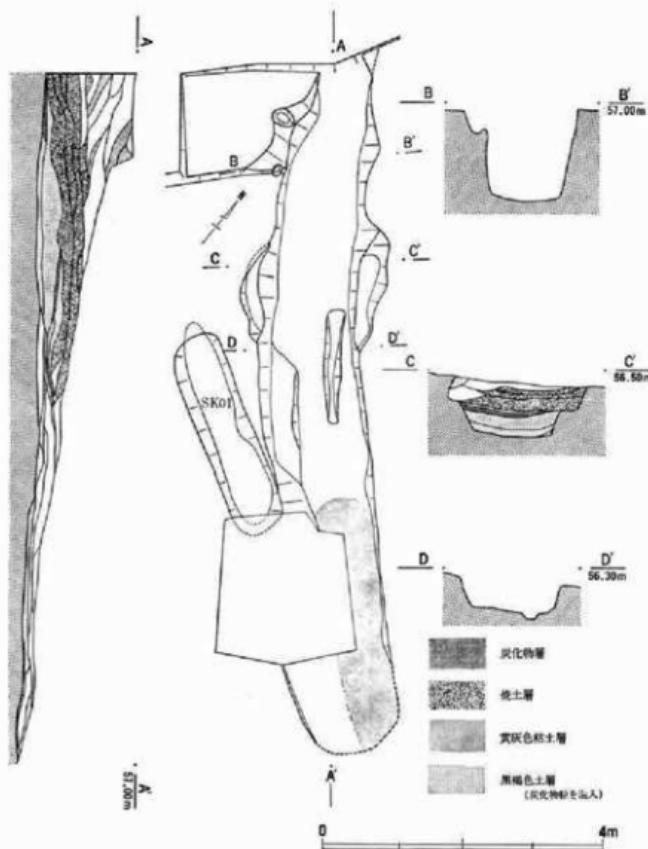
溝はSD14・17・20の3本がある。SD14は南側の斜面と平坦面を画するように検出された。長さ 7.8m ・幅 30cm ・深さ約 5cm を測る。覆土は暗褐色土である。SD17はSK05に平行

して走り、長さ 0.8m・幅 20cm・深さ 15cm を測る。覆土は暗褐色土である。SD20 は長さ 2m・幅 25cm・深さ 5cm を測る。覆土中には溶けて酸化した鉄片がわずかに出土した。

SD14からは大形羽口片（第15図・図版13-1）が 1 点出土した。胎土に砂粒・スサを混入する土製品である。灰褐色を呈し、外径 12cm・孔径 5.5cm・現存高 18cm を測る。両端は欠損しているが円筒形を呈する。外面にはアメ状の鉛錆が付着し、細かい沈線が縦位に施される。

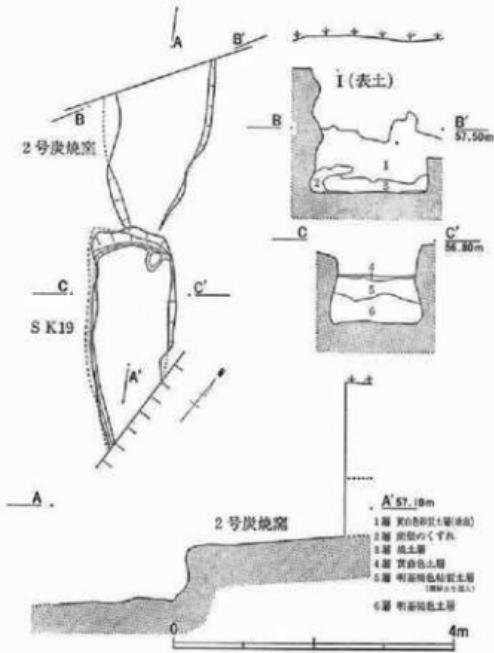
ピット 13基検出された。SD14 に沿って並列するが配列が不規則であり、性格は不明である。

(山本 琢)

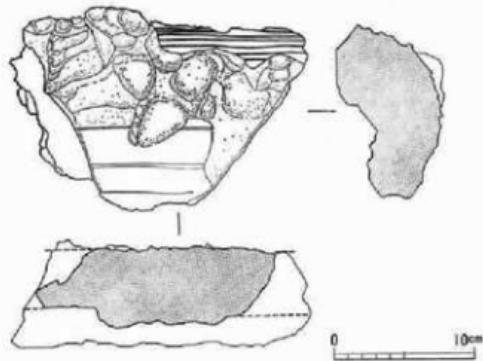


第16図 1号炭坑窓

(1/80)



第17図 2号炭焼窯とSK 19 (1/80)



第18図 SK 19 出土遺物 (羽口) (1/4)

4. 炭焼窯 (第16・17図・図版7)

内越遺跡では、横穴式炭窯3基、堅穴式炭窯3基の計6基の炭焼窯が検出された。

1号炭焼窯 (第16図、図版7-1-3) G 1区に位置する。北西端は調査範囲外にあるため、窯の全体は確認されなかった。横穴状を呈し、底面確認長9.9m・底面幅約1m・残存高1.3mを測る。くびれがなく、窓口・炭化室などの区別は明確ではない。中央部は幅1.9mと広がる段がつくられる。底面はほぼ水平であり、中央には溝がある。長さ約2m・幅0.3m・深さ0.1mを測る。排水溝と考えられる。覆土は4層に大別され、下層から黒褐色土層・炭化物層・焼土層・暗褐色土層である。焼土層中には天井部片と考えられる粘土ブロックが混入する。C-C'の土層断面図から、新旧2回以上の構築が考えられる。つまり、古い窯使用後、黒褐色土が堆積し、その後、炭化物層を底面とする新しい窯に改築されたものと考えられる。窓の東南部には黄灰色粘土が床状に貼られている。

新潟県内では真木山遺跡(関口か 1979)が例ある。

2号炭焼窯（第17図・図版7-4～6） G1区に位置し、北西部は調査範囲外にあるため窯の全体は確認できなかった。南東部ではSK19と重複している。底面確認長2.5m、底面最大幅1.5m、深さ0.9mを測る。両壁はアーチ状を呈し、火をうけ硬化している。底面はほぼ水平な平坦面である。覆土は3層からなり、1層は地山と同質の砂質土である。2層は天井壁崩壊土で焼成をうけ硬くしまっている。3層は焼土層であり、底面直上には薄く炭化物が堆積する。天井崩壊土の存在から傾斜地を利用して掘り抜かれた「地下式炭焼窯」と考えられる。改築等の痕跡は認められず、操業は短期間であったと思われる。

SK19（第17図・図版7-4～6） 2号炭焼窯の東側に接する。南東部は崖崩れにより欠損する。平面は隅丸方形を呈し、底面は平坦である。底面残存長3m、底面幅1.2m、深さ約1mを測る。奥壁と南壁に沿った底面には幅約5cm、深さ約3cmの溝がめぐる。覆土は4層から成り、最上層には黄白色地山土が版築状に貼られている。中層は腐植土を混入する明茶褐色土であり、下層は明茶褐色である。いずれも埋土と考えられる。底面直上にはわずかに炭化物が堆積する。轆道などは確認されないが、底面の炭化物の存在や平面形から炭焼窯の炭化室とも考えられる（十賀ほか 1979）。最上層黄白色土上面は2号炭焼窯の底面とほぼ同じ高さになることから、2号炭焼窯の床として使用された可能性が考えられ、SK19は2号炭焼窯よりやや古い時期に構築されたと考えられる。南壁に密着して覆土から大型羽口片（第8図・図版3-2）が1点出土した。円筒形を呈する土製品である。現存長20cm、外径約14cm、孔径約4cmを測る。灰褐色を呈し、焼成は良好。胎土にはスサと砂粒を多く混入する。外面には櫛状工具による沈線が縦位に施され、アメ状の鉛滓が付着する。SD14出土の羽口と同質であり、製鉄遺構と、炭焼窯との関係がうかがえる。

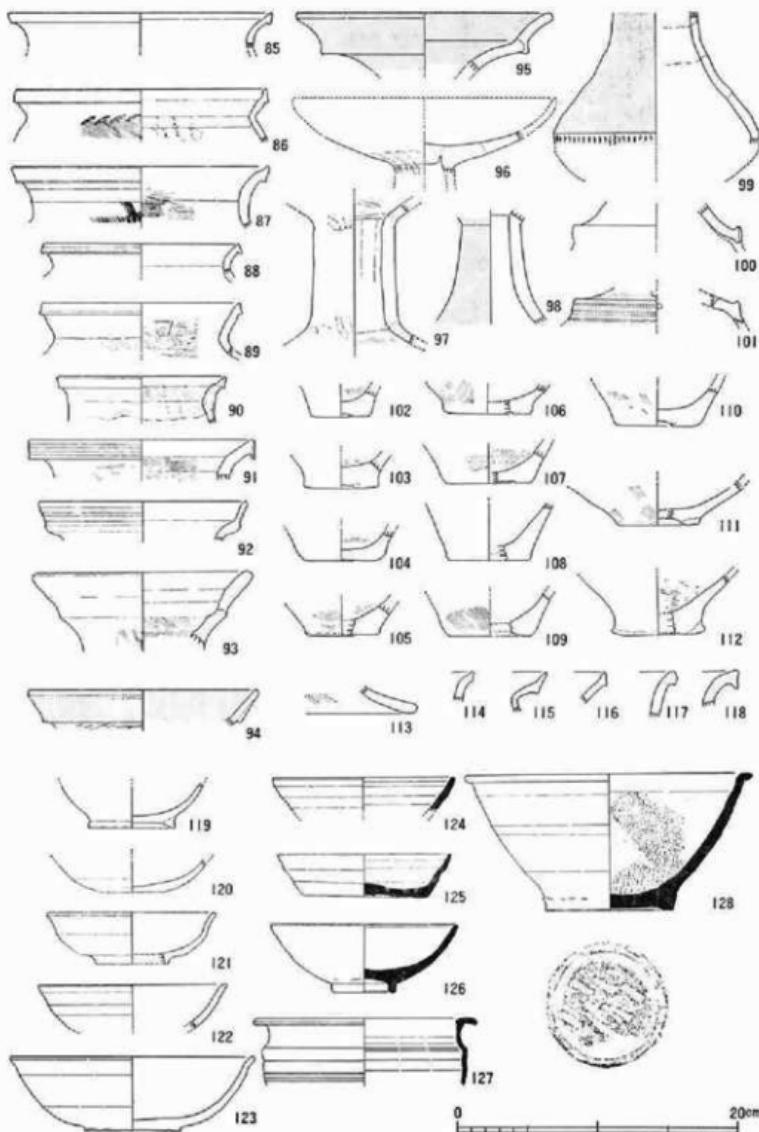
以上の横穴式炭焼窯のはかに土壤状を呈する堅穴式炭焼窯が検出された。SK06・23・26の3基である。おもに尾根頂上平坦面に多く検出された。SK06は前述したが、壁が焼けしており炭焼窯と思われる。SK23はC3-20区に位置する。円形を呈し、直径約0.9m、深さ0.2mを測る。覆土は炭化物を混入する黒色土の単一層である。壁には火をうけた痕跡は認められなかった。炭窓とも考えられる。SK26はB3-17区に位置する。円形を呈し、直径約0.9m、深さ0.2mを測る。覆土は黒褐色土の単一層で、底にわずかに炭化物が堆積する。壁は火をうけ硬化している。いずれも伏焼法の穴窯と考えられる。

各窯の時期を確定する遺物が出土しておらず構築時期は不明である。しかし羽口が出土し、製鉄遺構との関係が考えられ、近世～近代の所産と推定される。

（田海義正）

5. 遺構外出土の遺物（第19図・図版12）

弥生土器（85～118） 小破片が主体で器種・器形が判然としないものが多いが、甕・壺・高杯・器台・台付装飾壺が認められる。



第19図 遺構外出土土器 (1/4)

甕 (86~92・102~110・112・114~118) 二重口縁のもの (A1 類) は擬凹線をもつ92の1点のみである。短かく直線的に外反する口縁帯に、4条の擬凹線がめぐり、口縁部から頸部への屈折部は器壁が厚くなる。B類はB1 類 (88~90・114・116・118), B2 類 (117), B3 類 (91), B4 類 (115) がある。このうち B1 類がもっとも多いが、頸部のつくりは一定しない。86は頸部にハケ目原体と同じ工具による斜行刺突がめぐる。底部は中凹みのものと平滑なものがある。

壺 (93・94・111) 二重口縁 (B類) のものが1点ある。93の口縁部は内外面ともヨコナデで、端部は丸く肥厚し、頸部は内外面ともにハケ目である。器面に擬口縁の接合痕がみえるなど粗雑なつくりである。94は口縁部のみで器形は不明であるが、内外面の丹塗りから壺・高杯などの器種と考えられる。口縁部は粘土帶の貼り付けによって二重口縁状となる。内外面ともヘラミガキされているが、口縁部外面下部はハケ目痕がわずかに残る。底部のうち 111 は形状からみて壺のものであろう。

高杯 (96・113) 96 は皿状あるいは鉢状の杯部をもつと考えられる。杯部と脚部の接点は円板充填による。このほか 100・101 は棒状脚タイプ (A類) かもしれない。113 は外面に丹塗りがあり、B類の脚標部であろう。

器台 (95・97・98・100・101) 95 の受部は高杯に類似し、二重口縁となる。体部 (受部と脚部の間) は棒状のもの (97) と裾ひろがりのもの (98) がある。101 は擬凹線がめぐり、穿孔がある。孔数は不明である。

台付装饰壺 (99) いちぢく形の体部上半である。体部上半から最大径の間には稜があり、その下位に刻み列点が配される。外面は丹塗りがみられる。北陸地方東北部に特有の器形である。
(坂井秀弥)

土師器・須恵器 (119~125) 土師器は119のみ高台付杯で内面に黒色処理を施す。磨滅が著しく調整は不明。120は底部から体部下端にかけて回転ヘラケツリを施す。121・123は底部糸切り未調整で、121は円盤状の底部を持つ特異な形態である。123は大ぶりで胎土は精良、体部に墨書き様の痕跡がある。須恵器杯 125 は底部回転ヘラ切りで、口縁部外面から内面全体にかけて黒褐色の自然釉が付着しており、重ね焼きの際に一番上に置かれていたことがうかがえる。土師器・須恵器ともいざれも平安時代の所産である。

中・近世の遺物 (126~128) 灰釉陶器碗と甕・擂鉢の三点がF3区の第Ⅱ層から出土している。灰釉陶器碗はていねいな調整のものと内面全体と体部下端にかけて釉を濁け掛けし、淡黄緑色を呈する。内面には重ね焼きの際の道具痕がみられる。瀬戸・美濃系で中世の所産であろう。甕は薄手のつくりで暗褐色の釉を内外面に施す。擂鉢は内面に12条1単位の深い擂目を施し、外面上には暗茶褐色の自然釉がみられる。高台は削り出して底面には平行で2本1対の棒状圧痕が4単位認められる。甕・擂鉢とも产地は不明であるが近世～近代の所産と考えられる。

(高橋 勉)

V 考 察 ——内越遺跡出土土器の越後における編年的位置——

はじめに

内越遺跡で出土した土器は弥生時代末から古墳時代移行期のものである。これまで、新潟県における当該期の資料はいくつか報告されてはいるものの、土器様相についてはなお不明瞭なままであった。このことは、これと前後する時期についても縦体的に資料が少なく、比較する材料に乏しかったことも起因しているかと思われる。こうしたなかで、特に古墳時代初頭の遺跡がいくつか発掘され、良好な資料を得られたことにより、当該期の土器様相とその変遷が把握されつつある。そこで、ここではこれまでの資料を援用しながら越後における弥生時代末から古墳時代前期の編年を試み、当遺跡の編年的位置づけをしたい。

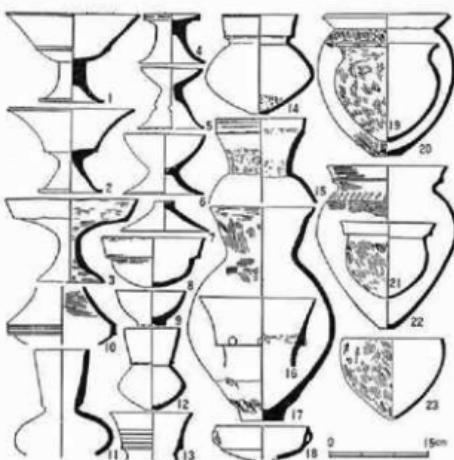
1. 北陸地方における研究小史

北陸地方における当該期の土器について、最初に具体的な資料を提供したのは、本県佐渡の千種遺跡である。千種遺跡の調査は昭和27年、大場碧雄、小出義治らによって実施され、出土した土器をもって「千種式土器」が設定された（第20回 大場・小出 1953）。千種式土器の位置づけは、それら土器が土師器と近似性をもちながらも、すべて平底につくられていることや個々の形態がきわめて多様性に富み、わずかながら文様的要素をとどめていること（小出 1958）などの点から、弥生土器の要素に統一されてるとし、弥生時代終末期に位置づけるとともに、この土器は能登を経由した畿内文化の影響を受けて成立したことを指摘した。のちにこの土器が弥生土器か土師器であるかという議論が提起され、かつ批判された（註1）といえ、きわめて評価すべき多くの内容をもつといわねばなるまい。当時、資料はきわめてわずかであったし、その後、各地域においても弥生～土師器の過渡期については大きな議論がなされたが、いまだお一致の見解は得られていない。

千種式土器は北陸地方の代表的な土器として著名になったが、この後、浜岡賢太郎・吉岡康暢により、加賀・能登地方の古式土師器として「月影式」と「二ツ屋式」が設定され、前者から後者への編年的位置づけがなされた（浜岡・吉岡 1962）。このなかで千種式は月影式に包括されるとしている。月影式は二重口縁と撮凹線の甕がこれを代表し、二ツ屋式では甕口縁部の装飾・形状が退化するとし、これが時期差を反映するものと理解したのであり、この点がのちに批判されたことは後述するところである。二ツ屋式は畿内布留式との併行関係を想定（註2）し、

註1 千種式の位置づけについて、関雅之は千種式は畿内第Ⅴ様式に系統的関連を認めながらも、弥生時代末期とすることに疑義を示した（同 1962）。

註2 畿内では布留式が古くから知られていたが、大阪府小若江北遺跡（坪井 1956）や舟橋遺跡（田中ほか 1962）の土器によって、具体的な内容が理解されるようになっていた。すなわち、小型器台と小型丸底甕のセットと、完全な丸底でタタキ目がない甕・二重口縁甕がメルクマールにされていた。



第20図 千種遺跡の土器（新潟県教育委員会1953より転載）

ツ屋式を発展させ、それぞれⅠ様式・Ⅱ様式とした（註3）（吉岡 1967）。ここでは北陸地方のなかの地方色に注意し、東北部（越後・佐渡・越中・能登）・西部（加賀～越前北部）・越前南部に三分して把握しようとしたことは評価される。たとえば、甕をとりあげて、西部では二重口縁が多いのに対し、東北部ではこれと「く」の字口縁が折半し、内面ヘラケズリの技法が少なくなるとしている。

千種遺跡の調査以降、昭和30年代の新潟県では、新潟市六地山遺跡（寺村 1956）、新井市斐太遺跡（近接する百両山遺跡・上ノ平遺跡の總称、駒井ほか 1962）の調査が実施された。斐太遺跡は千種式との類似性が指摘され、その年代的位置づけは当を得たものであったが、六地山遺跡の土器は東北系の窓口の土器が含まれていたことなどから、弥生中期に位置づけられる結果となり（上原・磯崎 1968）、はからずも複雑な土器様相が浮き彫りされる結果となった。

県内で千種式につづく土器として認識されたのは、昭和42年に発表された西蒲原郡黒崎町緒立遺跡の古式土器である（上原ほか 1967、永峯・磯崎 1971）。この土器は「緒立Ⅱ式」とされたが、千種式との比較において、類似点として、壺・甕とともに二重口縁をもつこと、甕の底部が縮小化し丸底・尖底に近いまでの形態が出現すること、さらには文様の喪失に加えて器面調整のためのハケ目調整が盛行することなどが指摘されるものの、複合口縁の甕形土器、環状

明確に「土師器」として把握する一方、月影式については結論を留保しているものの、第一に月影式の土器が山陰地方との類似性をもち、この期にいたって弥生後期の地方色が齊一化されつつあること、第二に月影式の遺跡数が増大すると同時に、後期前半にみられた大集落が分散縮少する傾向より、農業共同体の変貌を想定させるという重要な指摘をおこなった。

その後、吉岡は北陸地方の古墳時代の土師器についてⅠ～Ⅶ様式を設定し、さきの月影・二

註3 Ⅰ様式は弥生時代後期にみられた地域差が稀薄化の傾向を強めながらなお残存し各種磨製石斧・石包丁の消失・鉄製農工具の導入や遺跡の立地の違い、などから弥生時代とは違う要素が見いだされるとした。

把手のついた壺・鉢形土器などの器種が存在しないのと同時に、複合口縁甕洞部肩の連続する刻文、壺の円形浮文・貼り付けや凹線文・流線文あるいは刻み目などの手法がみられないなどの相違があり、佐渡と越後の地域差を考慮してもなお編年的には千種式につづき二ツ屋式と併行するとした。

この時期ではほかに、長岡市横山遺跡（中村 1966）、佐渡郡真野町浜田遺跡（本間 1969）などが報告されている。

さて、前述した吉岡の編年はこれ以後のひとつの指標となり、いまなお古墳時代を通じた唯一の編年として大きな位置を占めるものであるが、このうち月影式と二ツ屋式を発展継承させた第Ⅰ様式・第Ⅱ様式については疑問とする意見が橋本澄夫によって出された（橋本 1975）。橋本は「月影式」と「二ツ屋式」は一部は時間的に前後するものであるが、大部分は地域による違いであるとした。すなわち、「二ツ屋式」は同時期における能登の土器であり、決して時期的に前後するものでないという。このような加賀と能登の土器様相の違いは、資料が増加した現在さらに明確にされつつあり、両地方ばかりではなく、土器の地域色は充分注目しなければならないであろう。

昭和40年代以降、大規模な調査によって、これまでうかがい知ることができなかつた集落、あるいは墳墓などがいくつか検出され、研究も大きく進展した。こうした成果を受けて、弥生時代末～古墳時代移行期の代表例である石川県塚崎遺跡の出土土器によって、塚崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式が設定された（吉岡 1976）。塚崎Ⅰ式は弥生時代末期に位置づけられる柳田うわの式に、塚



第21図 越後における弥生時代終末～古墳時代前期の遺跡分布図

崎Ⅲ式は月影式に対比し、塙崎Ⅱ式は両者の過渡的段階とされた。一道跡のなかで土器変遷が把握されたことは大きな進歩であった。

県内では当該期の資料が増加したのは、昭和40年代後半以降であり、住居址等の遺構も検出されるようになった。報告年を追って挙げると、中頸城郡吉川町長峰遺跡（関 1974）・見附市大平城遺跡（関ほか 1974）・佐渡郡真野町浜田遺跡（木間ほか 1975）・糸魚川市笛吹田遺跡（寺村 1973）・上越市山畠遺跡（小島 1979）・西蒲原郡黒崎町緒立遺跡（渡辺ほか 1979）・三条市狐崎遺跡（金子 1981）・西蒲原郡巻町大沢遺跡（甘粕 1981）など、があり、飛躍的に増加したといえる。

（横山勝栄・坂井秀弥）

2. 内越遺跡出土土器について

内越遺跡において検出された遺構のうち弥生時代末～古墳時代前期の所産と考えられるものは住居址1軒、土壇3基である。おもに丘陵頂上平坦部に位置し、各遺構は重複せず、平坦面（約600m²）に散在しており、これらの土器はさほどの時期差をもたず、一形式のうちに包括されるものと考えられる。遺物はB3・4、C3・4、D3・4区に集中する。出土土器は甕・壺・鉢・高杯・器台の器種がある。

■ 口縁部の形態により、二重口縁のA類と、「く」の字に屈曲する口縁のB類との二種に大別される。さらに細部の形態・手法の違いなどからA類は1～3、B類は1～4の7種に細分された。A₁類（58・92）口縁部外面に擬凹線があぐり、体部は卵形を呈する。58は外面ハケ調整の後、肩部に櫛状工具による斜行列点文を施す。A₂類（2・46）口縁端部がわずかに垂下するもの、垂下しないものなど多くの形態を含むが一括してこの類にまとめる。B₂類（1・3・6・117）口縁端部はヨコナデによりつままれるがB₁類に比べて純化する。B₃類（9・91）口縁端部は長く垂下し、帯状を呈する。外面に擬凹線を施す9と素文の91がある。B₄類（50・52・115）B₁に類似する形態であるが、B₁類に比べ口縁端部は長く外反する。以上の7類に甕は細分されるが本遺跡出土甕の内外面の調整はハケ調整がほとんどであり、内面にヘラケズリを施した例は認められなかった。器形はB₁類が他の器形に比較し、12個体と多く、B₁類以外は2～4個体と少ない値を呈している。46・58・92などは富山県江上A遺跡（久々 1982）、4・86は石川県塙崎遺跡（吉岡 1976）に類似が認められる。

■ 口縁形態・器形などから、A～C類、長頸壺・台付装飾壺に大別される。A類（11～13・53）「く」の字に屈曲する口縁部から口縁端部はヨコナデによりつまみ上げられ、先端は尖がる。B類（4・93）二重口縁を呈する。93は厚手のつくりである。C類（49・54～56・94）口縁外面をハリツケにより肥厚させ、口縁端部に棱をつくる。小破片であり、全体の器形は不明である。口縁部の器高が高く、頸部が細くくびれることから壺として分類したが甕とも考えられる。94は内外面ヘラミガキが施され、丹塗りされることから、壺以外に鉢などの器種が想起

される。長頸壺(57)外反する口縁部からくびれた頸部基部となり、なで肩の体部となる。口縁部中位外面には斜行刻目がめぐる。本例のみが長頸壺と確認された。台付装飾壺(99)いちじく型の体部から「ハ」の字に広がる台部となると思われる。体部最大径に刻目がめぐり、外面はヘラミガキのち丹塗りをする。11・57・99などは富山県江上A遺跡、93は石川県塙崎遺跡に類似がある。

鉢 口縁部が二重口縁となり、器高の深い10と、外反する口縁と算盤玉形の体部となる浅いもの59・60の二種がある。两者とも遺存状態が不良で調整等は不明である。10は石川県塙崎遺跡などに同器形のものがある。

高杯 全体の器形がわかるものはない。そのため脚部の形態によりA類・B類に大別される。A類(28・29)棒状有段脚となるもので、杯部は径24cm、28cmと大振りである。杯部口縁は強く外反する。28は内外面はヘラミガキのち丹塗りされる。B類(25・96)脚部が「ハ」の字に広がるものであり、杯部はヘラミガキ調整を施す。25は丹塗りがみられる。25・96は富山県江上A遺跡例に類似したものがある。

器台 高杯と同様、全体の器形を推定できるものはない。脚部の形態によって、棒状有段脚A類と「ハ」の字に広がるB類に大別された。A類は個体数が多く、杯部口縁は外反し、器部外面に擬四線をめぐらすものも多い。脚部段部上方には穿孔を施すものが一般的である。孔数は不明である。いずれもヘラミガキされ、丹塗りされる。B類は33・98のように高い器高を呈するものと、62のように低いものがある。32のように長く外反する口縁から段部はわずかに垂下し、脚部は中位が細くしまるものもある。62のようにラッパ状に広がる底部で、穿孔は棒状工具によるものである。

土器は器形のほか、胎土、焼成からも4種に分類される。①灰褐色を呈し、砂粒などを混入せず、良好な焼成を呈するもので、甕A₁・3・B₃・台付装飾壺・高杯・器台など丹塗りするものに主として使用される。②赤褐色を呈しわざかに砂粒を含む。断面は黒灰色を呈し、焼成は不良で器壁は磨耗している。高杯 A₁・器台B(32)・壺A・Bがこれである。③灰褐色を呈し、わざかに砂粒を含む。焼成は不良なもので、長頸壺・甕A₂(46)のみに使用される。とくに高杯、器台については①②が使用されている。

内越遺跡出土土器について各器種の特徴を述べてきたが、器種構成や各器種の形態は石川県塙崎遺跡I式・柳田うわの遺跡(谷内尾 1973)・富山県江上A遺跡などと共通する様相であり、巨視的にみれば北陸地方という地域性が考えられる。ただし甕の体部内面の調整はハケ・ナデのみであり、江上A遺跡例などにかなり普遍的にみられるヘラケズリの手法は明確には1例も認められなかったことや、甕の口縁部形態でA₁類(二重口縁で口縁外面に擬凹線を施すもの)が2例と量的に少ないと、同時期の北陸西部・中部の地域との相違点としてあげることができる。本遺跡出土の土器は、塙崎I式を主体とする時期に比定されるものと思われる。

(横山勝栄・山本 勝)

3. 各期の設定(第22回)

前節では本遺跡の土器を概観し、その特徴を述べたが、これらの土器は北陸地方西部～中部とほぼ共通する要素が認められ、年代的位置づけもほぼ把握することができた。ここではこれらの土器の縦年の位置をさらに明確にするため、古墳時代前期の編年を3期に分けて試みたい。諸段階の設定に際しては北陸地方西部(加賀・能登北方)の研究成果に照らしつつ、すめるところとする。これは前述したように越後と北陸地方西部の土器様相に共通性が存するという理由のほかに、当該期の研究は吉岡らによって早くから進められ、一定の成果をあげていることによる。なお、佐渡については千種遺跡をはじめ二・三例があるが、その歴史からみて越後と佐渡はかなざしも同一にとらえられないことや資料を直接觀察することができなかつたことから、一応除外し、文中で必要に応じてふれることにする。

(1) 第一期

当期の特徴は高杯・器台の器形に代表される。すなわち杯部に稜をもち、口縁部が大きく外反する大形品である。この時期のものとしては、六地山遺跡・大平城遺跡・山畠遺跡・笛吹田遺跡・大沢遺跡などがあげられ、内越遺跡も当期に含められる。このほか、三条市館遺跡(中島 1981)・三島郡寺泊町五分一稻場遺跡(戸根ほか 1978)に若干例がある。なおここであげた大沢遺跡例は、おもに方形周溝墓とされる遺構からの出土であり、一応当期に含めたが、新しい要素をもち、次期に包括されるものもあるかと思われる。

以下器種ごとにその特徴をみてゆく。

高杯(1~12) 大形で浅い杯部をもつA類(註4)(1~9)が主流をしめる。杯部は体部と口縁部との間に段があり、これにより口縁部が大きく外反する形態をもち、ヘラミガキが入念に施され、赤色塗彩される例も多い。杯部には比較的浅いもの(2・4)とこれよりはやや深いもの(6・7・8)がある。稜はわずかに垂下したり(3・6・7)、稜の上に沈線があげられる(2)などの例があり、口縁部は外反した上端部に面をもつもの(1・2・7)や上方へつまみあげられてその先端が尖るもの(6)がある。上端部に面をもつものには沈線(1)やスタンプ施文(9)を加える例がある。スタンプ施文は北陸地方ではほぼ当期のみに存在するようで、9・14のほかに館遺跡に高杯A類の有段棒状脚根端部かと思われる例がある。脚部には棒状のもの(4・8)と基部から緩やかに開くもの(5)がある。前者は8のように有段状の据部を有する可能性が強い。この根端部は折り返し状に肥厚する。

このほかに、杯部下半から立ち上がり、段をもって外反するとみられるB類(10)がある。

脚部は棒状と思われる。11は次期に定形化する小型の杯部をもつタイプの祖形とも考えられる。

註4 本文の器種分類は内越遺跡のものとはことなる。これは内越遺跡の土器が全器種がそろっていないことと、次期以降出現する器種があることによる。

12は東海地方の欠山式の高杯に類似するが、杯部が小型であり、その系譜は明確でない。

番台（13～15） 高杯A類の杯部に類似した受部をもつ大型品A類（13）、と受部が直線的に大きく開き、口縁外面にやや広い面をもつB類（15）がある。体部（受部と攝部の間）も高杯の器形に準じている。14はスタンプ施文の例であるが、高杯の可能性もある。

鉢（16・17） 例が少ない。16は台をもつ可能性があり、高杯10に類似することも考えられる。17は底の底部の器形に「ハ」の字に広く口縁部を付したものであり、煮沸に使用されたものと思われる。

台付装飾壺（18） 良例に乏しく、内越遺跡に体部上半が遺存する例があるのみである。北陸地方東北部に多いタイプである。

壺（19～24） 全体の器形が把握できる例が少ない。典型的な二重口縁壺はない。口縁部に横描波状文をもち、頸部に突帯が付される。19は東海系と考えられる。20・21は長めの筒状の口縁部をもち、口縁部は短く屈折し、その外面に擬凹線がめぐる。

壺（25～54） 口縁部の形態よりみると、かなり多様性に富む。大別すれば二重口縁部でないものでは、端部に面をもつA類、端部が丸いB類があり、このほか二重口縁のC類、受口状のD類がある。この4種をさらに施文の有無で分けた。調整は口縁部はヨコナデで、ほかは内外面ハケ目であるのを通例とする。体部内面ヘラケズリ技法はきわめて例外的である。

A類は口縁端部にヨコナデによる面をもつ。ここに凹線をめぐらす例（A2類）もいくつかみられるが、量的には少なく、これがない A1類が斐のなかで量的に卓越している。口縁端部は強く上方へつまみあげられず、下端が垂下するものも目立つ。口縁端部が丸くおさまるB類は当期にはほとんど例がなく、わずかに大沢遺跡にみられるにすぎない（註5）（33）。二重口縁のC類には擬凹線をもつ C2類（35・36・38・40）と素文の C1類（34・37・39・41）がある。35は体部肩に擬凹線と同一工具による斜行削突がめくる。39～41を除いては口縁部の立ち上がりが直線的で二重口縁部の屈曲は段が短く垂下するなど固く感じられる。これに対し、41は立ち上がりが外反気味であり、42はこれがやや内傾するなど、新しい要素をうかがわせる。内面ヘラケズリの技法はこのタイプの41のみにみられる。受口状のD類には、口縁部が素文の D1類（43～45）と刻み目、あるいは斜行列点をもつ D2類（42・46・47）がある。後者には口縁部全面にある46とその下端にある42・47がある。43は口縁の立ち上がりが小さく、A1類の範疇に含めるべきかもしれない。受口状口縁は近江地方を中心に弥生中期後葉から発達したものである。伊勢湾地方のS字状口縁成立直前にも類似例があるが、ここにあげたものは、これらの地方の影響で在地において成立したタイプと考えられる。これに対し、48・49は施文や細部のつくりから搬入品と推定される。つくりについてみると、49の端部が明瞭に面をもち、これが外方へひき出されているのは、その特徴としてあげうる。このほか搬入品としては中部高

註5 当例は体部が球体に近いなどやや特異である。

地型標識文をもつ54がある。信濃地方の箱清水式か上野地方の樽式かは決めかねるが、この系統の土器はこれまで越後平野部ではあまり知られていない。

以上の土器のほかに、六地山遺跡では縦目の土器がかなり存在する。この種の土器は東北地方の天王山式土器と共通する要素が指摘されており、ハケ目調整の土器よりも古くみるむきもある。しかし出土状況はこれらを時期差として理解されうるものではなく（寺村 1956），文様でも天王山式そのものとはことなり、これより新しい要素が指摘されている（中村 1970）。こうした点を勘案するならば、両者が全く文化系統をことにしたものであり、同時期に併行して存在したとみることが可能であり、最近の富山県の調査例でも、遺構内で伴出するものがいくつかある（註6）。六地山遺跡では両者の正確な量比は明確ではないが、相半ばはせざとも決して敵量と表現されるものではなく、これらは搬入品でないことはまず明らかであり、東北系統の影響が少なからず存在したことが理解される。ただ、これら上器の分布はいまのところ不明瞭ながら、県内でも多少の差が存することは充分予想され、今後そのあり方に留意する必要があろう。このほか、県内初例となった続闕文系土器も北日本系文化の影響の一例としてあげられる。

（2）第Ⅲ期

当期では大型高杯（A類）の口縁部が外反しなくなり、杯部下位の内外面に段をもって長く立ち上がる杯が盛行する一方、小型器台・二重口縁壺などが新しく出現する。また、中型・小型の壺・鉢等の器種が多様化する。この時期はさらに二分される可能性が強い。遺跡例では、斐太遺跡・横山遺跡・狐崎遺跡・諸立遺跡2号住居址一括資料（狐崎ほか 1979）・長峰遺跡などがあげられる。千種式土器（第20図）と真野町浜田遺跡の一部の土器はこの時期にあたる。千種式土器は当期でも古い様相を呈している。

高杯（55～60） 1期で主体をなしたA類の系譜をひくもの（55・56）は、口縁部が直線的にひらく。段はのこり、55は沈線と列点があぐる。このタイプは少なくなり、かわってやや小型のB類（57～59）が多くなる。B類の高杯は杯部の下位に段をもち、長く外反気味にたちあがる。段は内外面ともに明瞭である。57は段の上位に沈線があぐる。これらのうち58は、ほかのものより体部の長さに比して、口縁部のたちあがりがやや短い。脚部は杯部に比して小さいが、59は基部からほとんど直線的に開き、長く発達しているなどやや特異である（註7）。浅い杯部とその下辺に段をもつ55は東海系とみられる（註8）。

器台（61～67） 小型器台が出現するが、なお大型品も存在する。ただし、当期のうちでも新

註6 たとえば上山町江上B遺跡S D03（宮田 1982）がある。

註7 脚部が長く発達した高杯として、箱清水式のものがあげられる。

註8 たとえば愛知県朝日遺跡に類似がある。この形態の高杯は関東地方にもかなり分布しているが（日本考古学協会 1981），バレススタイルの壺と同様東海地方から波及したものとみられる。

しい時期に位置すると考えられる諸立2号住居址一括資料には大型品は含まれていない。A類は受部が強く外反し、口縁が複合状となる。62は強く外反する受部に円形の透かしをもつ。B類の系譜と考えられる63は低く扁平な器形をとり、口縁端部は面をもつものの上方へはつまみあげられない。小型器台（C類）は多様な形態がみられる。64は受部と裾部の径が同じで体部は棒状に近く、65～67は受部径に対し裾部径が大きい。受部の形態はそれれことなる。66・67には同形透かしが3ないし4個穿たれる。

蓋（68～71） 1期ではいまのところ例がない。内面にかえりがあるもの（68）、ないもの（69～71）があり、大きさも多様である。ヘラミガキや赤色繪彩（71）などからみて、壺類の蓋と考えられる。

鉢（72～76・79） 有台のものも含めて、器種はかなり多様である。72・73は甕の底部に類する器形でヘラミガキが施される。74は半球体の体部に口縁端部が短く外反する。75は有段で大きく外反する口縁部に半球体の体部をもつ。鉢としてはかなり大型で、類例に乏しい。76・79は台付である。76は16などの系譜も想定され、類例もあるが、79は短く直立する口縁や、台の三角形の透かし（註9）など特異である。

合付壺（77・78） 1期の18に系譜が求められ、器形は口頸部と体部の境が明瞭となり、口縁部下辺が突帯状に肥厚し、有段口縁となる。体部中位に凹線様の突帯をめぐらすもの（78）もある。

壺（80～92） 1期では明確ではなかった二重口縁の形態が出現し、普遍化する。これらには口径が小さくあまり外反はしないもの（81・83）、大きく外反するもの（85・87）、やや小型で広口の二重口縁のもの（82・88）などがある。84はこれらのなかで、口縁の外反度が小さく、古い形態と考えられる。83には口縁下辺に沈線があぐるが、口縁帶全面に沈線をめぐらし、擬凹線とするものもある。二重口縁でないものもいくつかの形態があり、広口のもの（89）やこれよりやや頸部がしまったもの（91・92）などがあるが、いずれも口頸部は短い。88は口縁端部に棒状浮文が2本セットで付され、東海系の要素がみられる。同じく東海系のものとして胴部上半に櫛描平行直線文と「く」の字を横位に連続させた文様をもつ例が孤崎遺跡にある。

堀（93～107） 口縁部の分類でみると、D類がほとんどみられなくなり、C類も相対的に少なくななるかわりに、A類ではA₁類が多くなり、B類がやや増加する傾向が看取される。また、斜行列点や擬凹線も少なくなる。内面ヘラケズリ抜法は1期同様少なく、C₁類の100にみる程度である。1期と個別に比較した場合、明確に区分しえないものも多いが、次のような傾向がうかがわれる。A類では口縁端部に擬凹線をもつA₂類がなくなり、A₁類では口頸部に直立する部分をもち「コ」の字状となるものがみられるようになる。上方へのつまみあげが強くなり、口縁下端が垂下するものは一般的でなくなる。前時期より器形は体部に丸味を帯び

註9 三角形の透かしは箱清水式の高杯にある。

る。C類は101のように口端部内外面とも屈曲が明瞭なものを含みつつ、これが純化する形態がめだち、104のようにほとんど明確でないものもみられる。体部上半の斜行列点は当期のなかで古様に位置する千種遺跡にわずかにみられるが、一般的ではない。C₂類の擬凹線は横山遺跡にある(101・102)ものの、前期よりさらに減少するようである。

搬入品と考えられるものに、東海系の台付甕(105)、近江系受口状口縁(106)がある。107は口頸部に柳描の平行直線文をもち、48などに共通する点もあるが、口縁部の形狀は異なっており、その土器系統は不明で、搬入品とは断定できない。

(3) 第Ⅲ期

当期は大型の高杯(A類)と器台が完全に消失し、小型器台の盛行、小型丸底壺の出現によって特徴づけられる。このほかの器種はほぼⅡ期からたどることができ、器形もその新しい時期のものと明確な差はない。ただ、丹塗り以外の装飾的要素はすべて払拭される。代表例として西山町高坂B遺跡(註10)、曾根遺跡などがあげられる。

高杯 B類のものが存在するが明確ではない。

器台(108~109) 大型品は完全になくなり、小型品が盛行する。受部端が短く屈折して立ちあがる108、皿状の受部をもつ109など、受部の形態は一定でない。

壺 数は少なくなり、衰退の方向をたどる。

小型丸底壺(110・111) 口径に比して器高がやや高いもの(110)とこれより低いもの(111)のほぼ二種がある。器壁は薄く、ていねいに研磨されている。

鉢(112・115) 壺の底部と同じ形態の112は前時期の系譜下にあり、口縁が有段で浅い半球体の体部をもつ115は76の器部と似てはいるが、この系統よりは畿内系の影響が看取される。

装飾長頸壺(113・114) 77・78の系譜と考えられる。口縁下辺の突帯はない。

壺(116~122) 器種はほとんど前期のものを踏襲する。二重口縁のものは内面の屈曲に対して外面はほとんど屈曲しないものがめだつ。117は小型で胴部に1つの穿孔がみられ、特殊な用途が想定される。

壺(123~133) A₁類・B類・C類がある。擬凹線をもつC₂類はみられない。Ⅱ期でB類がやや増加しているが、この傾向は当期にはいって顕著であり、A₁類に迫るほどであるが、なおA₁類が量的に凌いでいる。器形は伝統的タイプともいべきA₁類がやや胴長で、最大径がやや上位にくるほかは、体部高が低くなり、丸くなる傾向が強い。C₁類は二重口縁の屈曲がほとんどめだたず、内面のそれは直線にちかい。調整は前時期同様ハケ・ナデが卓越しており、内面のヘラケズリはおこなわれていない。

131・132は伊勢湾系のS字状口縁甕で、搬入品であることはそのつくりの精緻さからみてま

註10 昭和48年西山町教育委員会発掘調査。報告書は近刊。発掘資料以外で宇佐美第美氏所蔵遺物もある。

ず疑いない。器壁はきわめて薄く、頸部下に横位のハケ目が一周する。133は二重口縁でC類に含められるが、内面にヘラケズリが施され、とくに器底が薄く、口縁部のつくりがほかと全くことなることから、搬入品と考えられる。なお、130は受口状を呈しており、一応D類に含めておく。

(横山勝栄・坂井秀弥)

4. 各期の編年的位置

以上、弥生時代後期から古墳時代前期を3期に分けて、それぞれの時期について概説してきた。この3期の設定については他地域、とりわけ北陸地方西部の編年研究を参考にしてきたが、ここではそれぞれの時期がどのような編年的位置にあるのか、考えてみたい。このためには、ここでとりあげた土器がどのような系譜にあるのか、特徴となる個々の器種をとりあげてみていくことにする。

(1) 第Ⅰ期

当期と特徴づけるものは前述したように、大型高杯である。北陸地方の中期においては、高杯という器種がきわめて種であり、重要な器種ではない(註11)(佐原 1978)だけに、この時期にいたって普遍的にみられることは注目される。この器形は石川県柳田うわの遺跡・富山県江上A遺跡などにみると、北陸地方全般に普遍的に分布する(註12)。そして、北陸地方ばかりではなく、東海地方や畿内地方でも主要な高杯の形態となっている。東海地方では愛知県朝日遺跡における朝日V形式(高橋・加藤 1982)、大參義一のいう山中期(大參 1968)にあり、畿内地方では畿内第V様式中の丸山竜平のいう馬場川期(丸山 1976)寺沢編年の3~4段階(寺沢 1980)にある。さらに西日本一般にはこの系譜にあると考えられる高杯は、分布している。北陸地方では、口縁部が肥厚して面をもったり、環状把手や弦線・刻み目・スタンプ施文(註13)などの文様的要素をもち、装飾性に富んでいる。東海地方もほぼ同様であり、口縁部のたちあがり部分に波状文をもち、脚部柱状部に弦線やシグザグ文(「く」の字連続文)を施している。これに対し、畿内地方のものは棒状有段脚タイプに柳描波状文や円形施文など同時期の壹の文様と共に通する施文がみられるものの、裾ひろがりのタイプは無文を基本とする。このような相違はあるものの、ほぼ同一時期の所産であると推察され、弥生時代後期(畿内

註11 新潟県の例では柏崎市下谷地遺跡(金子 1982)によって具体的に知られる。

註12 箱清水式の高杯は脚部がこれとなるもの、東海地方からの波及が想定される。杯部はこの範囲、ないしはこの影響を受けて成立したものと考えられよう。

註13 スタンプ施文は、畿内地方では唐古遺跡にみると、中期後葉(第V様式)には存在するが北陸地方では後期の一時期に集中してみられ、文様はS字と鋸歯文の組み合せが多く、器種は棒状有段脚の高杯にはば限定され、他地域とはことなる特色をもつ。なお北陸地方でも加賀・能登・越中・越後の地域に分布する(谷内尾 1981b)。

第Ⅶ様式併行期) 後半から末葉に對比され、北陸地方西部では柳田うわの式、あるいは塚崎Ⅰ式と對比されよう(註14)。

一方、煮沸形態の甕は、越後の中期後半のものでは下谷地遺跡(金子 1982)にみると、いまだ櫛描文や小波状口縁などが普遍的に存在し、裝飾性を有しており、器形も口縁部が体部最大径を凌ぐ、いわゆる深鉢形を呈するものがめだつなど、縄文土器と共通する要素が指摘される。こうした傾向は当期では一部の東北系の窓目的土器を除いて、ほとんどみられなくなる。文様としては口縁端部の凹線文、擬凹線文、斜行刻み列点が一部に存するのみで、器形も体部の張りが大きくなっている。ここで A₁ 類としたものはⅡ期以降、明確に当地方の主流を占めるが、当期でもすでに過半を占めている。これは中期から発展する要素は充分認められ、在地型ともいべきかもしれない(註15)。他方、二重口縁と擬凹線は後期にはいって山陰地方に共通してみられ、同時に体部内面のヘラケズリ技法も中部瀬戸内地方とともにこの時期には存在する。北陸地方ではこの二重口縁に擬凹線をめぐらし、内面ヘラケズリをおこなった甕が、古墳時代初頭に著しく優位を占め、ひとつの明確な地方色を示す指標ともいえるが、越後では二重口縁・擬凹線タイプと内面ヘラケズリ技法はともに少なく、未発達であり、北陸地方西部と越後地方の間に確實に一線を画すことができる。この点に関しては吉岡がすでに指摘している(吉岡 1961)が、最近の富山県上市町の一連の資料(江上A遺跡など)をみると、越中東部まではかなりこの要素が一般的であることから、吉岡のいう北陸東北部(能登・越中・佐渡)でものうちに越中・越後の国境となる「親不知・子不知」がひとつの分岐点として把握される。

受口状口縁は近江地方で中期後葉に出現し(註16)、この地方の一特色として定着し、布留式併行期まで存続するタイプである。これと類似するものに伊勢湾地方で発達する S 字状口縁があるが、次第に至るまでは近江地方と区別しにくいものがみられる。いま当地方の受口状口縁がどの地方の影響によるものかは即断できない。ただ、北陸地方と近江地方・伊勢湾地方と地理的条件を考慮すると、近江地方との関連を考えたほうが理解しやすいともいえる。

このように、煮沸用の甕をみると、その形態や技法に地域色が鋭敏に反映されていることが知られ、かなり齊一性を帯びた高杯や壺などと好対照をしており、ひとつの文化圏やそのなかの一定の地域の抽出には有効な指標といえる。

さて、これまでみてきた甕は大局的には西日本の影響を少なからず受けているものである

註14 長頸甕も畿内第Ⅶ様式を代表する器種であるが、北陸地方にある長頸甕は口部が短いもののこの影響で成立したものと推定される。ただ、口縁部が短く屈折し、二重口縁様となり、ここに擬凹線をめぐらす手法は北陸地方あるいは山陰地方によくみられるものである。

註15 口縁端部に凹線をもつ A₂ 類は、凹線が発達する畿内第Ⅳ様式のものに類似する。これについては山陰地方の系統より畿内地方の影響とみるべきかもしれない。

註16 石川県木本B遺跡に畿内第Ⅳ様式併行の受口状口縁甕がある(湯尻ほか 1975)。

が、東北地方天王山式系の繩目の土器がこれらに併存することはおおいに注目される。こうした様相は越後ばかりではなく、越中東部までは微量ながら伴出する事例がみられる。東北地方においては弥生後期の土器様相がかならずしも明確ではなく、なお検討を要するが、西日本系の土器は中期から後期末に至るまで、いくつかの器形の変化や新しい器種の出現など、その諸段階を明瞭に把握しうる要素をもっているのに対し、東北系の土器ではこれが不鮮明なため、この間の時期的変遷もとらえがたい事情があることも想定される。いずれにしろ、六地山遺跡にみると、東北系統の土器がかなりの量を占めることは、西日本系の文化のほかに東北系文化も当地方に大きな影響を与えていたことが知られる。

(2) 第Ⅱ期

高杯・器台・壺などの精製器種が北陸地方とほとんど同じ様相を呈することはⅠ期同様である。大型の高杯にかわって出現するやや小型の高杯や器台などは月影式といわれるものに特徴的であり、当期が北陸地方の月影式に併行することはまず疑いない。富山県中山南遺跡（橋本ほか、1971）は当期の代表例であり、これらは千種遺跡・斐太遺跡・横山遺跡などと共にした点がいくつか見い出せる。ただ、当期は新旧に二分されることが考えられ、これらの三遺跡はともに古様を呈していると思われる。

さて、この時期に出現する小型器台はかつて古式土師器の指標とされたが、最近の調査例からすると、畿内地方では第V式に続く庄内式初頭か、これにわずかに先行する繩向I式で出現している（関川 1976、寺沢 1980）。小型器台は古墳時代初頭にはほぼ全国的に出現・盛行し、その波及規模は著しいものがある。こうした点からすると、当地方においても出現期はさほど時間の差がないものとみて大過ないと思われ、当期が畿内の庄内式に併行することが考えられる。千種遺跡の壺（報告書挿図14-4）は二重口縁で櫛搔波状文と円形浮文が付され、庄内式の撤入品ともみられるし、繩向遺跡における北陸地方の撤入品からみた畿内との併行関係（関川 1976）は庄内式が月影式に対比されている。なお、小型器台でもさまざまな器形が存在したが、64・65は畿内にはみられないもので在地型と称すべきかもしれない。

さて、壺は越後の地域色が明確化する時期である。すなわち、口縁端部が上方へつまみあげられるタイプが圧倒的に多くなり、北陸地方西部で月影式の壺（二重口縁・櫛凹線）がよく発達するのと対照的であり、この時期に北陸地方のなかでの地域色が明瞭になるといえる。橋本澄夫も指摘するとおり月影式壺は福井平野と金沢平野を中心に分布し、能登・越中は主要な分布圏ではなく、滑川市本江遺跡（小島 1979）では越後と同様にA1類が圧倒的に多くなっている。月影式壺の主要分布圏外では、この壺の有無、あるいは口縁部の形態などで時期を決定できることを留意しなければならない。

このように、Ⅱ期は月影式に併行し、畿内地方の庄内式には対比できると思われる（註17）。なお、斐太遺跡・横山遺跡・千種遺跡は当期でも古く、孤崎遺跡もこれに含まれる可能性が強い。また猪立2号住居址一括資料のごとく、大型器台をもたない一群は新しい様相として把握すべきであろう。

（3）第Ⅲ期

当期を設定する際に指標にした器種は小型丸底壺である。これは小型の鉢（119）とともに新しく出現するもので、その出自は畿内地方に求められるが、これらと小型器台は畿内地方の布留式期を特徴づける小型精製土器として知られている。越後では小型丸底壺と鉢はともにさほど一般的ではないが、高塩B遺跡ではこれら小型丸底壺・鉢・器台の三種がセットで検出されたことにより、当期の様相は明確になった。もとより、高塩B遺跡の土器は遺構にともなっておらず、一括資料ではないが、甕にみる要素は前時期と異なる点がいくつか指摘され、ここに新しい時期設定がなされるものと考えられる。これらは布留期でも古い段階と考えられる（安達・木下 1974）。小型丸底壺の口頸部がよく発達しているのもこれを裏づける。また、撒入品である東海系のS字状口縁甕は頸部内面のハケ目が残ること、体部上半の横位のハケ目から安達・木下編年の「ⅢA類」にあたり、飛鳥地方の件出例から布留式の古段階に比定される（安達・木下 1974）。また、北陸系撒入土器の133は口縁部の特徴から月影式よりも新しい要素がみられ、古府クルビ式とされるものに該当すると考えられる（谷内尾 1981a）。

（横山勝栄・坂井秀介）

5. むすびにかえて

以上、現在の越後で資料的にまとまっている弥生時代末から古墳時代前期までの土器を3期に分けて述べてきた。第Ⅰ期は塚崎I式併行期、第Ⅱ期は月影式併行期、第Ⅲ期は古府クルビ式併行期であり、畿内編年に対比すると、それぞれ第V様式末、庄内式、布留式（古段階）となる。ところで、この時期についてはつねに大きな問題が存在している。すなわち、弥生時代と古墳時代をどの段階で区別するのか、あるいはどの時期から「土師器」とするのかという問題がそれである。ここでは第Ⅱ期以降を一応古墳時代と記してきたが、それは畿内および北陸地方で庄内式・月影式以降を古墳時代とする意見が、一部では批判を受けつつも大方の賛同を得ている現状に即したからにはかならず、特に越後の社会的背景まで念頭に入れて識別したものではない。この点については今後究明しなければならないものの、現時点では当地方と北陸地方西部、さらには畿内地方との併行関係を明確にすることが、急務と考えており、この点では前述の時代区分が流動的であり、それぞれの時代の概念規定について定見をもちあわせ

註17 吉岡編年（1967）では、当期は第1様式として把握される。なお、60の高杯は東海地方では欠山期の新しい時期に相当するようである。

ていないことを明記しておきたい。このような現状ではあるが、当期における越後の状況について、いくつかのことがらをもとに若干の考察をおこないたい。

まず、北陸地方のなかでの地域色である。越後の当期の土器様相は北陸地方に包括して把握できることは再三述べてきたが、すべての器種が全く同一というわけではなく、壺・高杯・器台などの一般的な精製器種はともかく、煮沸形態の甕にはいくつかの相違点があり、ここに北陸地方のなかでの地域色をうかがうことが可能である。第Ⅰ期では越中まで内面ヘラケズリ技法や二重口縁をもつものがある程度の数量を占めるが、越後では内面ヘラケズリ技法は未発達であり、二重口縁が占める割合も少ないとことから、越中と越後の間にひとつの境界を設定できる。これに対し、第Ⅱ期ではいわゆる月影式の甕が発達するが、この分布が北陸地方西部（加賀地方中心）に集中し、能登・越中では少なく、越後ではさらにわずかとなり、第Ⅰ期とはやや様相を異にしている。すなわち、この期にいたって越後は能登・越中などと大局的に共通するのであり、かつて吉岡が設定した北陸地方西部と東北部の地域差（吉岡 1967）はここに明確になってくるのである。第Ⅲ期以降もこの傾向は継承され、以後北陸地方の基本的な地域単位に踏襲されるようである。たとえば、畿内で発達した完全な丸底をもつ布留式甕は、西日本を中心に広い分布圏をもち、ひとつの畿内文化の波及を知る指標となりうるが、これは石川県金沢市高畠遺跡（橋本 1975）にみると、加賀地方までは在地の甕にとってかわるほどに分布し、その普及が知られるのに対し、越中では資料的にやや不足している感があるものの、在地型の甕との交代現象は認められないようである。したがって、月影式甕の主要分布圏が布留式甕の分布圏に継承されるのであり、月影式の段階で大局的な地域単位が形成されたことが知られる。このことが政治的な動向を直接反映するとみることにはなお吟味が必要であろうが、この地域（能登を含む越前）が5世紀までには大和朝廷からコシとして把握されていたとする文献からの見解（末沢 1965）もあり、ひとつの地域設定には妥当な材料といえよう。

一方、六地山遺跡にみると、東北系の土器が弥生時代末までは少なからず存在することは、当方が西からの影響ばかりでなく、東北地方からのそれも受けていたことを明示し、両者の文化が重複、共存するという複雑な様相を呈していたことがうかがわれる。弥生時代末期に西日本の文化影響が及んでいた地域は、このような点からみて、ほぼ越後を北限とすることなく、六地山遺跡の位置やこの種の土器がこれ以外ではあまりみないことからすれば、越後でも阿賀野川左岸の信濃川流域を中心とした蒲原地方がその接点とみられる。越中東部でもこれら東北系土器は存在するけれども、決て量的に多くはないし、阿賀野川以北ではいまのところ当期の西日本系土器は発見されていない。今後、この地域でも検出されることは容易に予測できるが、その場合は東北系土器がかなり伴出することが予測される。このような越後地方における地域差は弥生時代末期に限らず、古墳時代以降もなお存在する。たとえば、前・中期

の古墳は巻町福井所在の山谷古墳（前方後方墳）（註18）や同竹野町所在の菖蒲塚古墳（前方後円墳）が日本海沿岸では北限とされ（註19）、7世紀中葉、大化年間に最初の東北経営の拠点として津足橋・磐舟橋が築かれ、さらに7世紀末葉、持統年間にコシ園が越前・越中・越後に三分された当時は阿賀野川を挟んで越中と越後に分かれていたという、いくつかの歴史的背景が想起される（註20）。したがって、越後のなかでも地域差を看取ることは可能であろう（註21）。ただ、阿賀野川以北の地域が古墳時代以降も西日本の影響を受けなかったというのではなく、豊浦町骨根遺跡の土器のように畿内色に統一された土器様相の存在は認めておかねばならない。むしろ、ここで注目すべきは、東北地方の弥生土器がその終末まで繩目の手法をすこしきれなかったのが、古墳時代前期にいたって西日本の新しい器種・器形に変化するということから、その背景にある社会的変革が著しいものであったと想定されることである。

このように弥生時代末期には越後までひとつの大きな文化波及があったと考えられる。西からの影響という点では中期の櫛描文の波及に統くものといえるが、弥生後期というと、越後ではここでとりあげた末期のものしか明らかになっていない。櫛描文土器は中期末まで存続したとみても、なお六地山遺跡の土器とは少なくとも一段階の空白が存在すると思われ、一時期の断絶をへて末葉にいたって、遺跡が突如出現するかのごとき印象がもたれる。西日本系統の土器からみれば、このような状況とみなされ、後期前半から中葉についての様相は今後調査をすすめて解明する必要が痛感される一方、前述した東北系土器の時期的位置づけについて、再検討が要請されるものと思われる。ただ、最近の富山県上市町の一連の調査成果にみられるごとく、当期の遺跡がきわめて近接しながら立地し、しかもいずれも單一の同時期における所産と推定されることとは、ここにひとつの誤りを感じさせるものがある。いずれにしろ、北陸地方の土器が当期におよんで、山陰地方との関連を深めるなど、中期とは異なった土器様相のあり方は、この時期に大きなひとつの社会的な波動があったことを暗示する。それが第Ⅰ期末ないしは第Ⅱ期初頭にいわゆる高地性集落が出現するなどの新しい動きにつながるものともいえないだろうか。たとえば、大沢遺跡や斐太遺跡はともに沖積地とかなりの比高差をもち、眺望がきくなどの立地であり、斐太遺跡では集落をとりまくように環濠があり、瀬戸内地方や畿内地方に中期に一般的に出現する高地性集落の条件をみたしている（註22）。高地性集落は一般に

註18 全長約40mで、平野を臨む尾根頂上部に立地する。

註19 山形県南陽市に稻荷森古墳という前方後円墳（全長96m）がある（川崎 1977）が、これは内陸部の置賜盆地にあり、福島県会津大原山古墳と同じように東山道の伝播経路が想定される。

註20 米沢康のいう第2段階のコシ園が三分割当初の越中をさす（米沢 1965）。

註21 このことは弥生時代中期における西日本系櫛描文土器と東北系の土器（たとえば南御山Ⅱ式土器）の大局的なあり方にも共通しているといえよう。

註22 内越遺跡の調査地点では直下の沖積地との比高差は約15mであり、一面では高地性集落的な立地ではあるが、この程度の比高差は特定の要因がなくともあらうし、別山川流域の谷に対する眺望も南北とともに良好ではなく、いわゆる高地性集落とするには不適当である。

軍事的色彩の濃い特殊な集落とされる（佐原 1964）が、当地域では当期にはいってはじめて出現するようであり、それだけその背後にある政治・社会的な動向が注目されよう。このほか、笛吹田・大平城（註23）・大沢遺跡にある方形周溝墓や孤崎遺跡の方形堅穴住居址のベッド状遺構（高床部）もそのひとつの要素としてあげられよう。方形周溝墓はともかく、ベッド状遺構は弥生時代最終末から古墳時代初頭に山陰・北陸・畿内周辺部にいっせいに出現することから、とくに時代的特色をもったものと位置づけられる。

以上、土器に関連して、当時の歴史背景について二、三述べてきた。当期の研究はほとんど蓄積がなく、今後に期すべきことはあまりにも大きい。土器編年についてはさらに確実な一括資料によって、より明確化し、可能な部分は細分する必要がある。また、これと前後する時期についても、連続するかたちでその変遷を把握できるように、さらなる検討と新しい資料の追加を期待したい。

（横山勝栄・坂井秀弥）

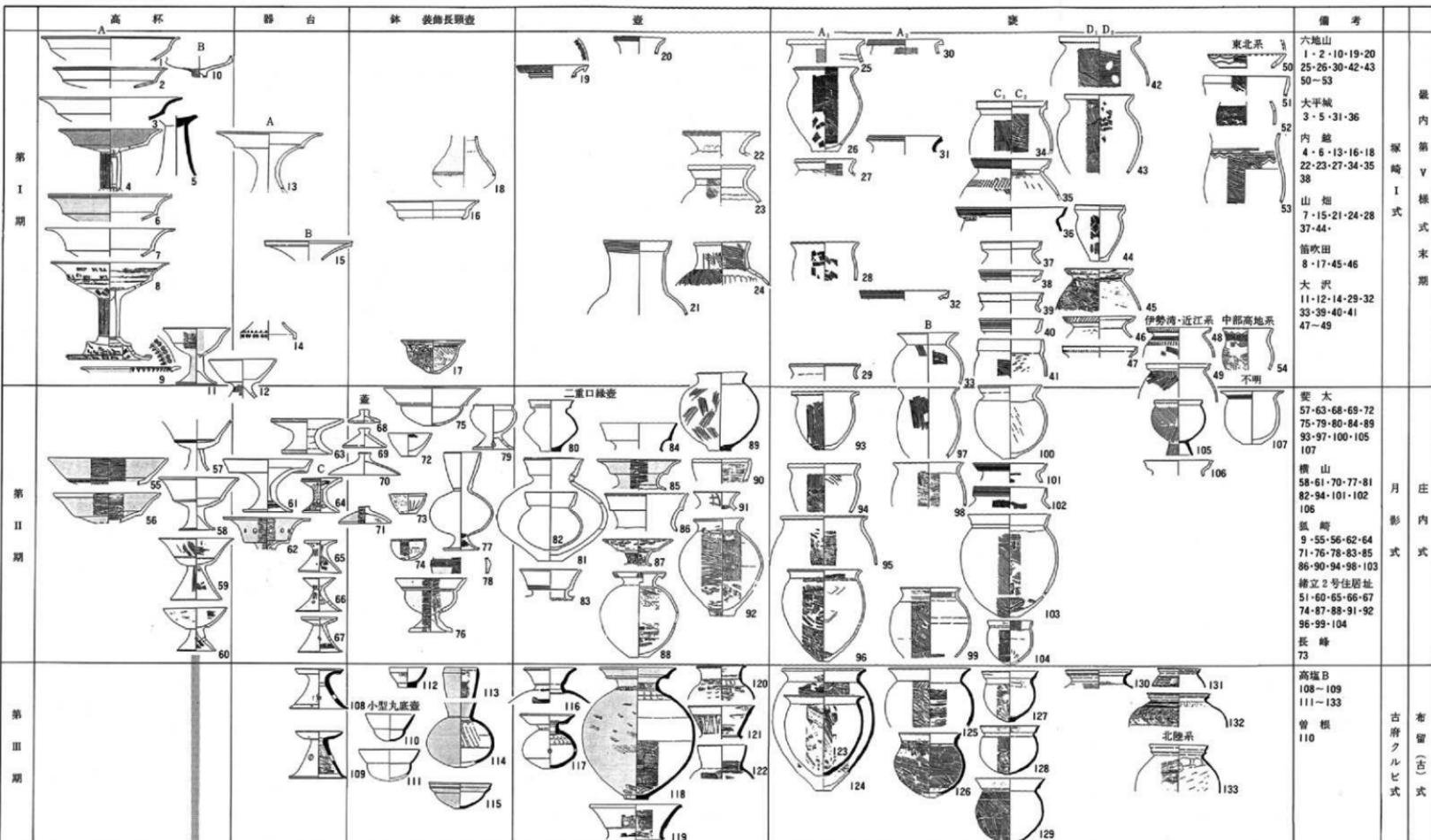
註23 大平城遺跡は沖積地との比高差約100mの尾根頂上部に立地しており、調査は中世の山城として把握し、報告がなされている（関 1974）。しかし、検出された「空堀」は規模・形状からみて、山城のものとは考えられない。また出土した弥生土器（報告では古式土師器とする）はこの「空堀」からのみ検出され、かつ、この「空堀」では他の時代のものはいっさい出土していないという（調査員戸根与八郎教示）。したがって、この「空堀」は方形に围绕する配置からみて、方形周溝墓とみなすことが妥当と思われる。

引用参考文献

- 足利健亮 1975「東国交通」『日本歴史地理誌』古代編 吉川弘文館
- 安達厚三・木下正史 1974「飛島地域出土の古代土師器」『考古学雑誌』第60巻2号 日本考古学会
- 甘粕 錠・米沢正・古川一明・古川知明 1981「大沢遺跡B」B地区の調査概報』巻町・高東村教育委員会
- 甘粕 錠・小野昭・若林正人・伊藤裕・荒木勇次・小林敏雄・荒川勝利・松井潔 1982「大沢遺跡II」新潟大学考古学研究室
- 磯崎正彦・中島栄一・横山勝栄・布川忠一・高井琢平・酒井和男・小林敏雄 1979「諸立遺跡第2次調査概報」黒崎町教育委員会
- 上原甲子郎・永幸光一・磯崎正彦 1967「越後諸立遺跡の古式土師器」『考古学雑誌』第52巻3号 日本考古学会
- 上原甲子郎・磯崎正彦 1968「北陸地方I」『弥生式土器集成』本編2 東京堂出版
- 大場敏雄・小出義治 1953「千種」新潟教育委員会
- 大參義一 1968「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』47 名古屋大学
- 岡本都榮 1977「出雲崎乙茂町乙茂田辺の古代遺跡」『柏崎・刈羽』No.5-1-10 柏崎・刈羽郷土史研究会
- 加藤晋平・沢四郎編 1982「鐵文土器大成5—統羅文一」講談社
- 金子拓男・駒形敬朗 1976「蛇山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第6 新潟県教育委員会
- 金子拓男・岡本都榮・家田順一郎・高橋陽子 1977「寺泊、出雲崎」新潟県文化財調査年報第16 新潟県教育委員会
- 金子拓男 1981「狐崎遺跡」『三条市史』資料編第1巻 三条市役所
- 金子拓男 1982「下谷地遺跡」『柏崎市史資料集』考古2 柏崎市役所
- 金子拓男・坂井秀弥 1983「新潟県刈羽郡西山町高塩B遺跡発掘調査報告書」西山町教育委員会
- 金子達 1976「刈羽郡の莊保」『かみくひむし』第21号 かみくひむしの会
- 川崎利夫 1977「出羽地域における古墳の成立」『考古学研究』24-2 考古学研究会
- 久々忠義 1982「江上A遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告書』上市町土器、石器編 上市町教育委員会
- 小出義治 1958「新潟県佐渡郡金井村千種遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編 東京堂出版
- 駒井和愛・吉田章一郎 1962「斐太」慶友社
- 小島俊彰・橋本正・藤田富士夫 1976「小杉町中山南遺跡調査報告書」富山県教育委員会
- 小島俊彰 1979「本江遺跡」『滑川市史』考古資料編 滑川市役所
- 小島幸雄 1979「山畠遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小林健太郎 1978「北陸道」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』 大明堂

- 佐原 真・小林行雄 1964『紫雲出』陀間町教育委員会
- 佐原 寛 1977『弥生土器』日本の美術125 至文堂
- 十菱 駿武・桜井清彦・大根信次・吉我昭彦・佐々木幹雄・寺田良喜・長井茂春・大竹謹昭・岡村淳・三井勝雄・岸本定吉・佐々木達雄・古川泰 1979『八幡山遺跡』東京都世田谷区教育委員会、八幡山遺跡調査団
- 坂井秀彌 1981「越後の弥生後期について」『第2回弥生時代シンポジウム発表要旨』長野、群馬、埼玉弥生研究グループ
- 佐藤信行 1976「東北地方、後北文化」『東北考古学の諸問題』寧楽社
- 関川尚功・石野博信 1976『疆向』櫻原考古学研究所
- 間 雅之 1962『佐渡弥生文化の諸問題』『古代学研究』33 古代学研究会
- 間 雅之・戸根与八郎・伊藤正一 1974『大平城跡、双ヶ塚遺跡発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告3 新潟県教育委員会
- 間 雅之・室岡博・本間信昭・胸形筋朗 1974『長峰遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
- 間 雅之・本間信昭・天田昭次・大沢正己・川村憲洋・鶴田龍郎・芹沢正雄・星代真 1981『真木山製鉄遺跡』豊浦町教育委員会
- 高橋信明・加藤信 1982『朝日型式の設定』『朝日遺跡』愛知県教育委員会
- 田 中 珠・田辺昭三・原口正三・佐原真 1982『船橋』平安学園考古学クラブ
- 千代 肇 1982『道南地方の土器』『縄文文化の研究6—統讐文、関東文化』雄山閣
- 坪井清足 1956『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県笠岡市高島遺跡調査委員会
- 寺沢 喬 1980『大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二、三の問題』『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集 櫻原考古学研究所
- 寺村光晴 1956『越後穴地山遺跡』『上代文化』第30輯 国学院大学考古学会
- 寺村光晴・安藤文一・千家和比古・山本恵 1978『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 戸根与八郎・家田順一郎・千葉英一 1978『五分一鶴場遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第14 新潟県教育委員会
- 中島栄一 1981『館遺跡』『三条市史』資料編、第1巻 三条市役所
- 永堀光一・磯崎正彦 1971『北陸地方Ⅱ』『土師式土器集成』I 東京堂出版
- 中村孝三郎 1966『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立博物館
- 中村孝三郎・岡本裕栄 1977『出雲崎町乙茂の銀鉄址』出雲崎町教育委員会
- 中村五郎・大木直枝 1970『山草荷2式土器について』『信濃』第22巻9号 信濃史学会
- 日本考古学協会編 1981『関東における古墳出現期の諸問題』昭和56年度大会シンポジウムⅠ資料
- 橋本豊夫 1975『金沢市高島遺跡』金沢市教育委員会
- 本間嘉晴・間雅之・本間信昭 1975『浜田遺跡』真野町教育委員会
- 本間信昭 1969『若宮遺跡出土の古式土師器』『佐渡国府緊急調査報告書(若宮遺跡)』I 真野町教育委員会
- 丸山竜平 1976『弥生式土器の發掘』『古代研究』10 元興寺仏教民俗資料研究所
- 峰山 嶽 1968『恵山式土器』『北陸道考古学』第4輯

- 宮田進一 1982「江上B遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告書』上市町土器、石器編 上市町教育委員会
- 谷内尾普司 1973「御田うわの遺跡」『羽咋市史』原史古代編
- 谷内尾普司 1981 a 「北陸地方の墓制」『西日本における方形周溝墓をめぐる問題』第111回埋蔵文化財研究会資料
- 谷内尾普司 1981 b 「内浦町の集落遺跡と古墳」『内浦町史』
- 湯尻修平・尾幸夫・塩川義雄 1975『金沢市戸木B遺跡調査報告書』石川県教育委員会
- 吉岡康暢・浜岡賢太郎 1962「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』32 古代学協会
- 吉岡康暢 1967「北陸地方における土師器編年」『考古学ジャーナル』1967—6 ニューサイエンス社
- 吉岡康暢 1979「土器編年と遺跡の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』I 石川県教育委員会石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団
- 米沢康 1965「大化前代における越の歴史的位置」『越中古代史の研究』越飛文化研究会
- 米沢康 1976「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第29巻5号 信濃史学会
- 米沢康 1980「大宝二年の越中國四分割をめぐって」『信濃』第32巻6号 信濃史学会



第22図 越後における弥生時代末～古墳時代前期の土器 1：8

(総立2骨性居址は%)　註 骨性りの表現は内始・低崎・高塙B遺跡例に限る。



遺跡周辺の航空写真（1975年11月 国土地理院撮影）

図版 2



遺跡近景（南西から）



遺跡近景（北東から）



1. 住居址全景（西から）

2. 炉 址



3. 貯 藏 穴

図版 4



1. SK01全景(東から)
2. SK02全景(北から)
3. SK24全景(北から)
4. SK25全景(北から)





製 鉄 址 (東から)



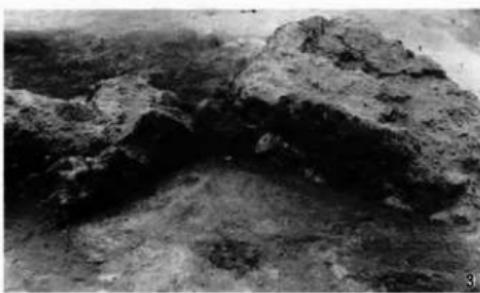
製鐵址B-B'土層断面 (西から)



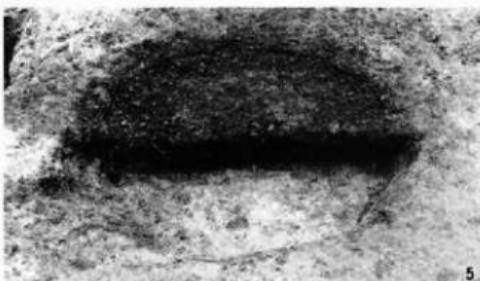
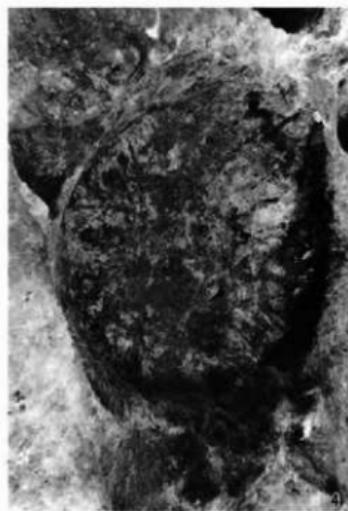
1. SK21, SK18全景（西から）



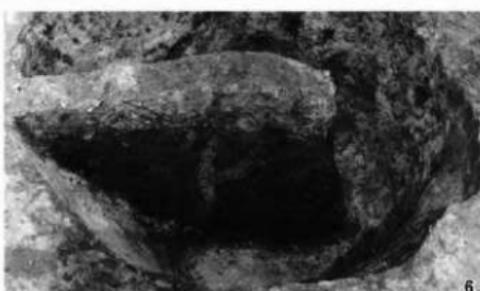
2



3



5



6

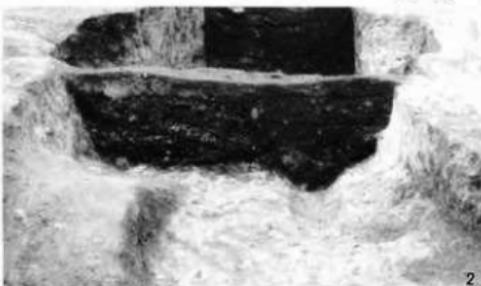
4. SK06全景（東から）

5. SK15断面（東から）

6. SK12断面（東から）



1. 1号炭焼窯全景 (東から)
2. 同 断面D-D' (東から)
3. 同 断面C-C' (東から)



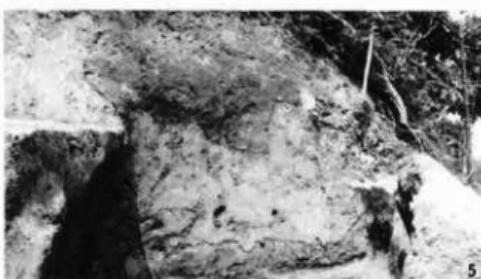
2



3



4. 2号炭焼窯 SK19全景(東から)
5. 2号炭焼窯断面 (東から)
6. SK19 断面 (東から)



5



6



B4 区 ピット群（北東から）



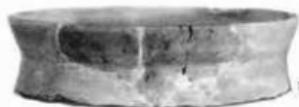
B3 区 ピット群（北東から）



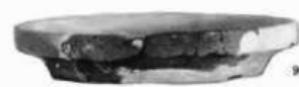
1



2



7



9



6



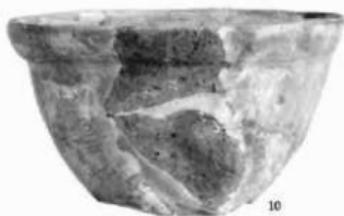
3



11



12



10



14



13

住居址出土土器(1)

S = $\frac{1}{2}$



住居址出土土器(2) 29~34・41~43 S=1/6

35~40 S=1/4

図版 11



土壤出土土器

S = 1/3

圖版 12

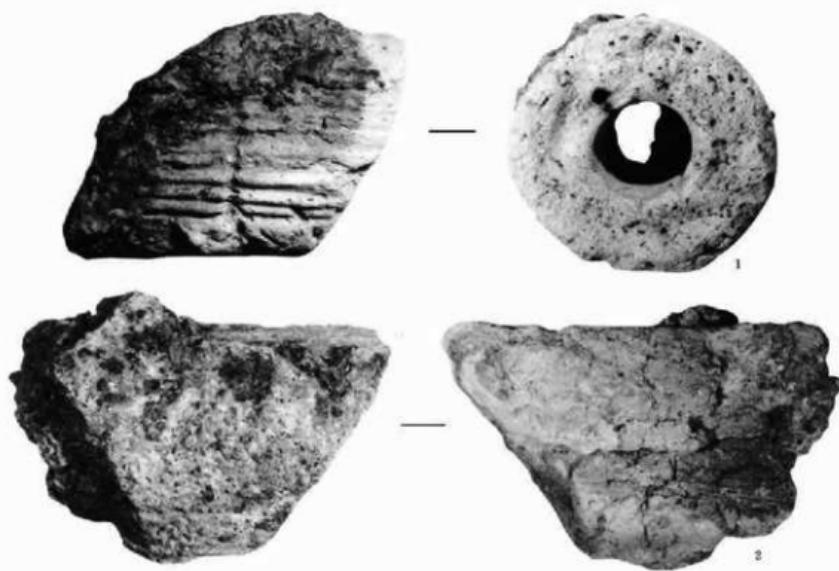


123 杯底部墨畫模版跡

遺構外出土土器 85~118 弥生時代末 121~125 平安時代 126~128 近世 S=1/2



S D14遺物（羽口）出土状況



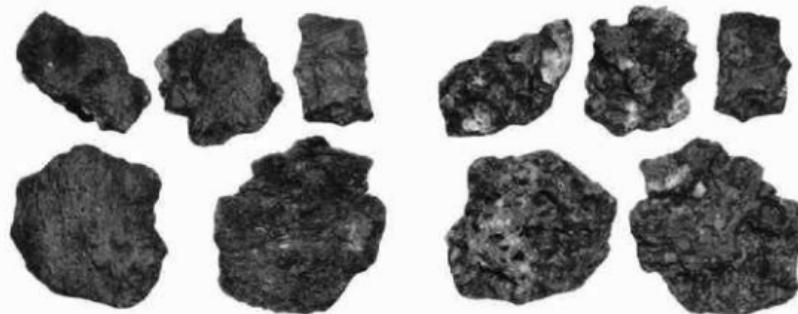
1. S D14出土遺物（羽口） 2. S K19出土遺物（羽口） S = 1/4



1. 出土鉢津

表

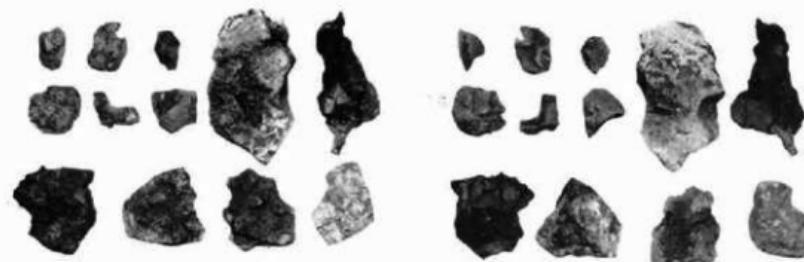
裏



2. 出土鉢津（スサ付着）

表

裏



3. 出土鉢津

表

S = %

裏

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第33

国道116号線

埋蔵文化財調査報告書

内越遺跡

— 1983 —

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会

印刷 長谷川印刷

埋蔵文化財発掘調査報告書 内越遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
4	22	告されている（中村ほか 1977）。	告されている（中村ほか 1977）。
7	21	トレンチ	グリッド
8	1	北壁の土層から	北壁の土層観察から
	5	G 1	G 1
	20	S K08~16の検出を始める	S K08~16の調査を始める
9	5	良好な造形状態を示していた。	良好な堆積状態を示していた。
10	2	しかし草刈後の地形観察によって、	しかし草刈後の地形観察によって
14	23	16には内塗りが	16には丹塗りが
17	4	本住居址は	本住居址出土の遺物は
18	1	（第10~12図・図版4、11）	（第6・10~12図・図版4、11）
20	6	71~74・81	71~74・78~80・83・84
	8	81	78・79
	12	（82~84）や底の底部の中凹みの	（80・83・84）底の底部が中凹みの
	12	61・72	61・72~74
	19	（62~65・83・84）	（62~65・81・82）
	19	（63~65・83・84）	（63~65・81・82）
	20	外面に83・84のように	外面に81・82のように外面に
21	1	S K25（第6図3・図版4~4）	S K25（第10図3・図版4~4）
	10	精鉄炉址1基	製鉄炉址1基
	18	赤変している部分がある。	赤変している。
25	1	炭焼窯（第16~17図	炭焼窯（第16~18図
	33	ほか 1979）が例ある。	ほか 1979）に例がある。
26	12	下層は明茶褐色である	下層は明茶褐色土である。
	13	確認されないが	確認されないが
28	19	いちじく形	いちじく形
33	21	焼成からも4種に	焼成からも3種に
34	4	古墳時代前期の	越後における弥生時代末から古墳時代前期の
	9	かなずしも	かならずしも
35	23	41は立	39は立
	24	42はこれが	41はこれが
36	27	棟をもつ95は東海系と	棟をもつ60は東海系と
37	22	二重口縁のもの（82・88）などが	二重口縁のもの（80・82）などが
38	22	二重口縁のものは内面の屈曲	二重口縁のものは外面の屈曲
	23	外面はほとんど	内面はほとんど
39	12	当期と特徴づける	当期を特徴づける
40	16	（吉岡 1961）	（吉岡 1962）
41	12~13	富山県中山南遺跡（橋本ほか1971）	富山県中山南遺跡（小島ほか1976）
	18	（関川1976、寺沢1980）	（関川ほか1976、寺沢1980）
	22~23	（関川 1976）	（関川ほか 1976）
	29	（小島 1979）	（小島 1979）
43	29	決して量的に多くはないし	決して量的に多くはないし
44	26	地方に中期に一般的	地方の中期に一般的
46	3	飛鳥地域出土の古代土師器	飛鳥地域出土の古式土師器
47	8	「東北地方、後北文化」	「東北地方の後北式文化」
	18	『繩文化の研究6—絆繩文、関東文化』	『繩文化の研究6—絆繩文・南島文化』
	31	日本考古学協会編『1981 関東における	日本考古学協会編1981『関東における
48	8	古代学協会	古代学研究会
	11	吉岡康輔1979「土器編年と遺跡の年代」	吉岡康輔1976「土器編年と造構の年代」

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第33集『内越遺跡』 正誤表追加

頁	位置	誤	正
21 p	下から3行目	SK18	SK26
第13図		SK18	SK26
図版6	左列 上段	SK18	SK26